

群馬県近世寺社総合調査 報 告 書

—歴史的建造物を中心に—

《寺 院 編》

令和4年3月

群 馬 県



図絵1 寺院121 泉龍寺 本堂 貞享5年(1688)



図絵2 寺院37 (漆原)長松寺 本堂 18世紀中期



口絵3 寺院97 実相院 本堂 延享2年(1745)



口絵4 寺院136 聰光寺 本堂 延享4年(1747)



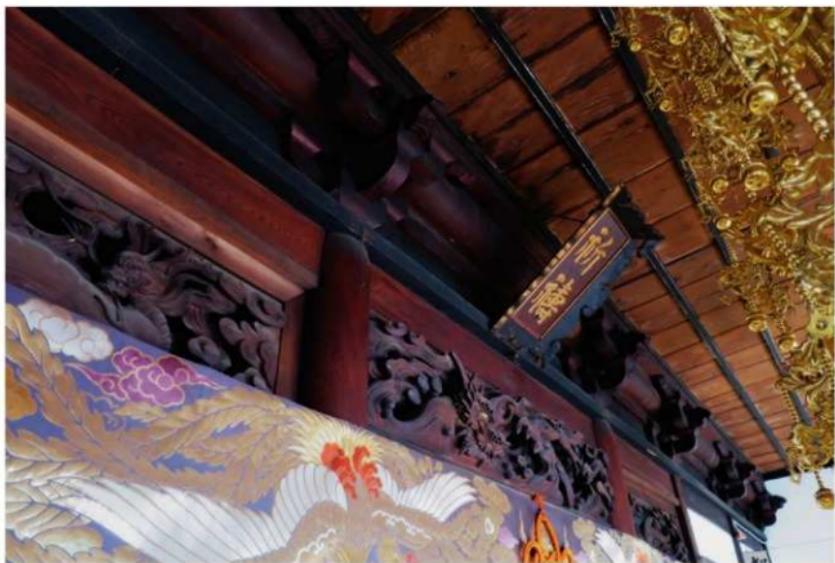
図絵5 寺院111 宗本寺 寛延3年(1750)



図絵6 寺院152 常楽寺 本堂 寛延4年(1751)



図版7 寺院125 淨運寺 本堂 宝曆3年(1753)



図版8 寺院75 補陀寺 本堂 明和3年(1766)



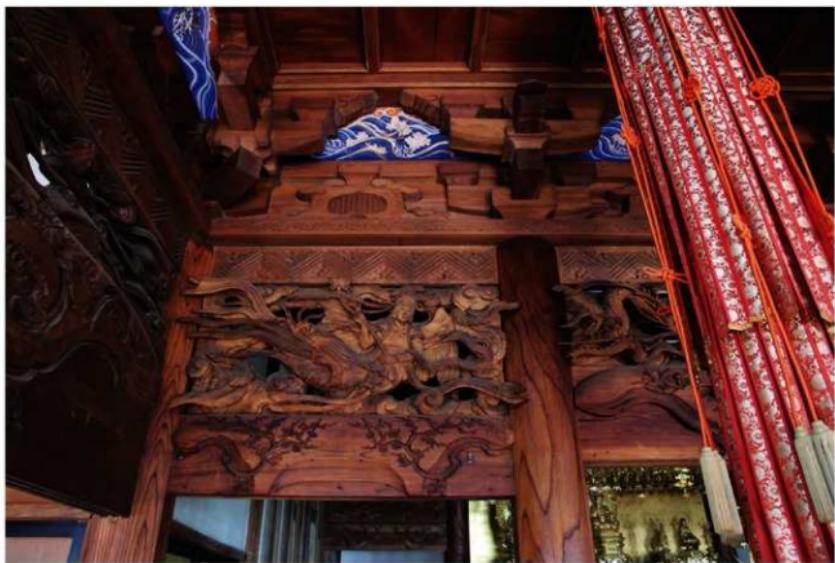
図絵9 寺院27 水澤寺 観音堂 天明7年(1787)



図絵10 寺院133 善昌寺 本堂 宽政3年(1791)



口絵11 寺院85 慈眼寺 本堂 19世紀前期



口絵12 寺院19 能満寺 本堂 19世紀前期



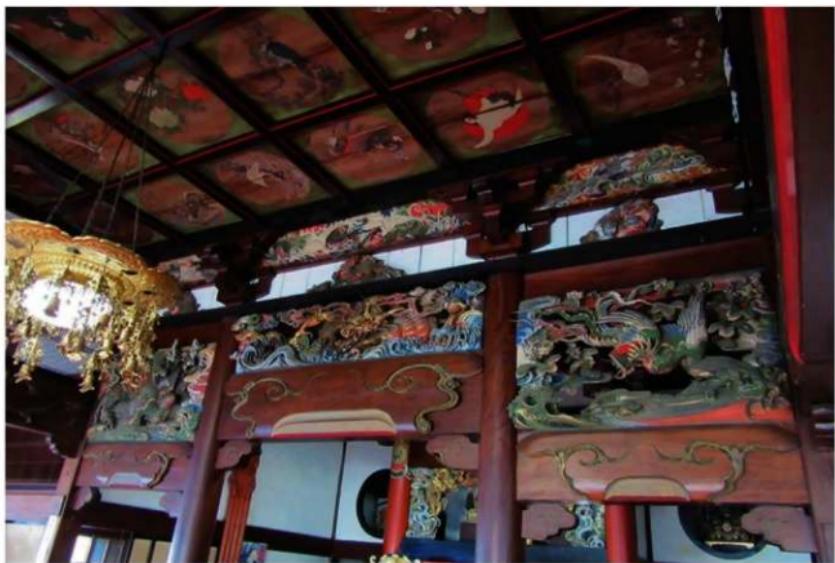
図絵13 寺院171 (神戸) 清水寺 本堂 文政11年(1828)



図絵14 寺院29 空惠寺 本堂 天保6年(1835)



口絵15 寺院11 華藏寺 本堂 天保 8年(1837)



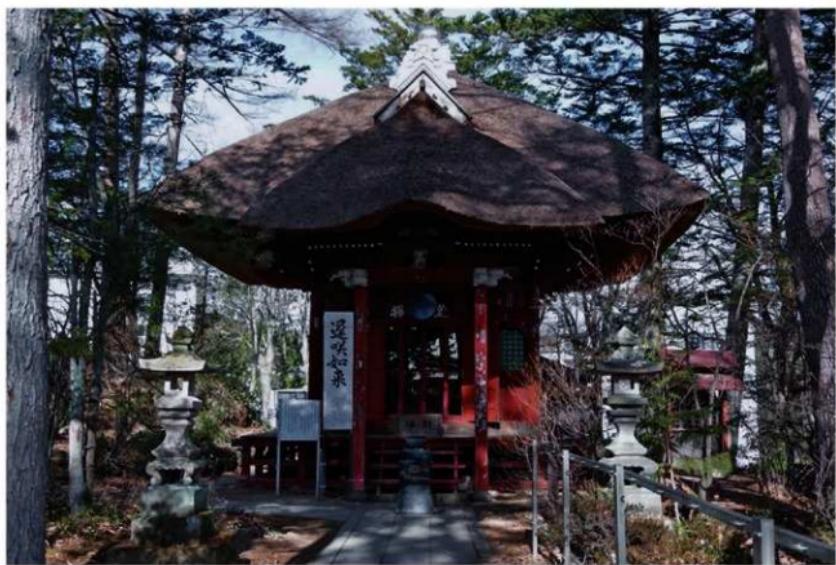
口絵16 寺院182 龍泉院 本堂 19世紀中期



図絵17 寺院103 (門前)吉祥寺 本堂欄間彫影刻 嘉永7年(1854)



図絵18 寺院73 長傳寺 本堂 慶応4年(1868)



口絵19 寺院118 光泉寺 積迦堂 18世紀前期



口絵20 寺院143 明王院 不動堂 宝永2年(1705)



口絵21 寺院7 瑞珊瑚寺 地藏堂 宝曆4年(1754)



口絵22 寺院12 本妙寺 鬼子母神堂 明和9年(1772)



図版23 寺院60 龍源寺 势至堂 18世紀後期



図版24 寺院41 達磨寺 観音堂 宽政4年(1792)



口絵25 寺院139 正法寺 觀音堂 享和3年(1803)



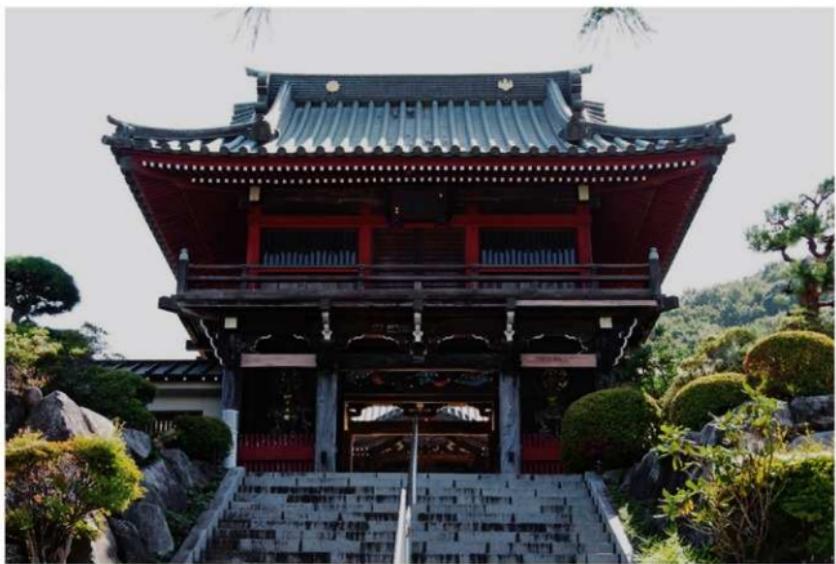
口絵26 寺院68 (光嚴寺)薬師堂 19世紀中期



図版27 寺院93 町田坊 観音堂 天保3年(1832)



図版28 寺院148 茂林寺 山門 17世紀後期



口絵29 寺院130 大雄院 山門 18世紀中期



口絵30 寺院58 仁夏寺 山門 明和元年(1764)



口絵31 寺院27 水澤寺 仁王門 天明7年(1787)



口絵32 寺院184 廉徳寺 山門 18世紀後期以前

例

- (1) 本報告書は群馬県地域創生部文化財保護課(現)が令和元年度から令和2年度にかけて実施した「群馬近世寺社建築総合調査」の報告書である。調査の委託先は一般社団法人群馬建築士会である。
- (2) 調査にあたり寺院の所有者・管理者・檀家総代をはじめとする多くの人々、及び各市町村教育委員会の絶大な協力と貴重な資料の提供を受けた。
- (3) 調査は群馬県地域創生部文化財保護課が選定した対象建物を予備調査と本調査に分けて実施した。本調査の対象は既に文化財として指定・登録されている建物、予備調査において本調査とすべきと判断した建物、既に調査済みの建物である。

予備調査の内容は写真撮影と住職等による聞き取り調査である。予備調査対象については概要表、解説文、写真を掲載した。

本調査の内容は写真撮影と住職等による聞き取り調査に加え、建物等調査、資料調査等である。本調査対象については概要表、解説文、配置図、平面図、写真、資料を掲載した。

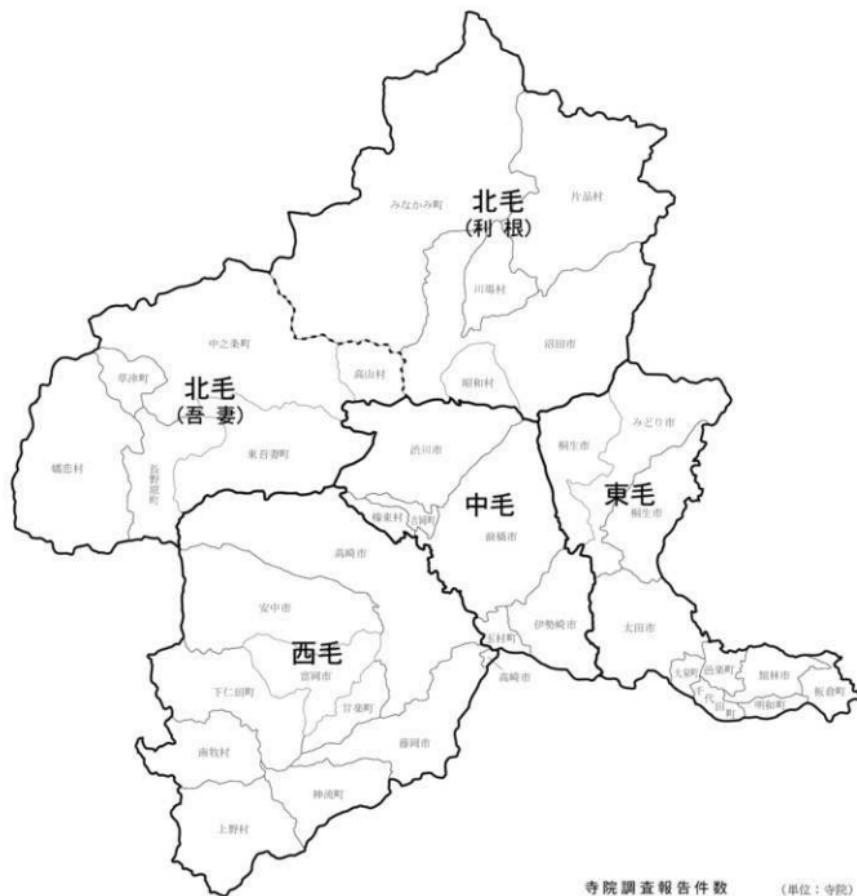
なお、まとめについては調査員の所感を掲載した。

- (4) 調査は5班体制でそれぞれの班にチームを編成し、複数の調査員で実施した。
- (5) 予備調査を実施した寺院の中から、群馬近世寺社総合調査委員会が建築様式や建造年代等から貴重性が高いと判断した寺院を選出し、本調査対象として本調査を実施した。
- (6) 建築解説における留意点は次の通りである。
- ・規模は正面、側面を間数(柱間数)、()内に実測値(単位m)を示す。
 - ・屋根の重数は二重以上を記し、一重の場合は記さない。
 - ・写真等で特記無きものは執筆者及びチーム調査員が撮影したものである。
 - ・図面は特記無きものは調査者の実測によるものである。なお、縮尺は紙幅の都合上統一されていない。寸法はmmで統一した。なお、小数第3位を四捨五入したので、必ずしも引き通し寸法に一致しない。

言

- (7) 推定建造年代等の時代区分は次の通りとする。
1世紀を3等分し前期・中期・後期とするが、必要に応じて世紀を2等分する前半・後半も採用する。それでも絞れない場合は、江戸時代を4期に分けて前期〔元和元年(1615)～万治3年(1660)〕、中期〔寛文元年(1661)～寛延3年(1750)〕、後期〔宝暦元年(1751)～文政12年(1829)〕、末期〔天保元年(1830)～慶應3年(1867)〕とした。
- (8) 本調査及び予備調査の解説は次の通りとする。
・本調査及び予備調査の解説は前橋市を最初とする市町村順とし、同一市町村ではそれぞれ調査順に並べた。
・1対象施設で複数棟ある場合の調査解説は重要度及び貴重な建物から順に並べた。
- (9) 予備調査の結果、建替により近世の建物でないと判明した寺院ならびに予備調査は実施したが本調査ができなかった寺院は除いた。
- (10) 群馬県近世寺社総合調査報告書は本編、寺院編、神社編からなるが、本書はその寺院編である。
- (11) 各建物解説における表の構造・形式欄に示す規模は身舎のものである。
- (12) 寺院名は原則として宗教法人名簿、及び各寺院が使用している呼称とした。なお同一名の場合は寺院の前に()地域名を記した。
- (13) 寺院における神社本殿は、便宜的に寺院建築として扱った。
- (14) 調査体制
群馬近世寺社総合調査委員会の指導のもと、群馬建築士会ヘリテージマネージャー協議会のヘリテージマネージャーが実査した。
・調査委員会
委員長 村田敬一
(前橋工科大学客員教授)
委員 上野勝久
(東京藝術大学大学院美術研究科教授)
委員 大橋竜太
(東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科教授)
委員 大野 敏
(横浜国立大学都市科学部建築学科教授)

寺院調査地区別図



寺院調查報告件數

（部位：四肢）

地域	本調査	予備調査	合計
中毛	28	12	40
西毛	29	21	50
北毛	21	11	32
(利根)	13	5	18
(吾妻)	8	6	14
東毛	26	33	59
合計	104	77	181

地区別調査対象寺院一覧表

寺名等の網掛けは本調査実施。報告No.の空欄は報告書掲載なし。

報告調査 No.	地区	所在地	名称	予備 調査	報告調査 No.	地区	所在地	名称	予備 調査
1 1	前橋市	紅雲町	龍海院		47 47	高崎市	白岩町	長谷寺	
2 2		鶴桝町植野	元景寺		48 48		下室田町	長年寺	○
3 3		鶴桝町植野	光巖寺		49 49		帷名町下室田	(大福寺)廣不動尊堂	○
4 4		日輪寺町	日輪寺		50 50		倉渕水沼	(水沼)蘿華院	○
5 5		小松木町	大徳寺		51 51		倉渕三ノ藏	全通院	○
6 6		公園町	乘明院	○	52 52		西明星	妙福寺	○
7 7		富士見町石井	瑞應寺		53 53		足羽町東明星	龍門寺	○
8 8		瑞穂町	圓林寺		54 54		足羽町富岡	長純寺	
9 9		柏川町女潤	觀光寺		55 55		引間町	妙見寺	
10 10		苗ヶ島町	(苗ヶ島)金剛寺	○	56 56		新町	宝勝寺	○
11 11	伊勢崎市	華藏寺町	華藏寺		57 57		吉井町長根	常行院	
12 12		山王町	本妙寺		58 58		吉井町神保	仁隻寺	
13 13		昭和町	天增寺	○	59 59		間之郷	(間之郷)觀音寺	
14 14		曲輪町	同聚院	○	60 60		藤間	龍源寺	
15 15		香林	唯觀音堂	○	61 61		矢場	法沢寺	
16 16		市場町	大林寺	○	62 62		藤間	光德寺	○
17 17		境	長光寺	○	63 63		東平井	円満寺	○
18 18		境	愛染院	○	64 64		鬼石町淨法寺	淨法寺	
19 19		境上武士	能満寺	○	65 65		譲原	満福寺	○
20 20	渋川市	渋川	真光寺		66 66		鬼石	福持寺	○
21 21		渋川	遍照寺	○	67 67		南蛇井	最興寺	
22 22		有馬	神宮寺	○	68 68		上高瀬	(光嚴寺)藥師堂	
23 23		上郷	良潤寺	○	69 69		富岡	(勝福寺)或田山不動堂	
24 24		八木原	清泰寺	○	70 70		妙義町諸戸	諸應寺	○
25 25		北横町八崎	角谷戸薬師堂	○	71 71		安中二丁目	龍昌寺	○
26 26		北横町八崎	雙玄寺	○	72 72		下秋間	桂昌寺	○
27 27		伊香保町水沢	水澤寺		73 73		板鼻二丁目	長傳寺	
28 28		中郷庚	雙林寺		74 74		松井田町松井田	(松井田)不動寺	
29 29		上白井	空惠寺		75 75		松井田町新堀	補陀陀	
30 30	猪俣村	赤城町勝保保	宗玄寺	○	76 76		松井田町土塙	乾窓寺	○
31 31		村上	如意寺	○	77 77		松井田町新船	(松井田)金剛寺	○
32 32		村上	(如意寺)岩井堂觀音堂	○	78 78		樽原	中正寺	
33 33		山子田	柳沢寺		79 79		上野村	乙父	泉龍寺
34 34		長岡	東光寺		80 80		津流町	万場	千手寺
35 35		広馬場	字舎寺	○	81 81		下仁田町	清泉寺	
36 36		下野田	(下野田)華藏寺		82 82		下仁田	清泉寺	
37 37		津原	(津原)長松寺	○	83 83		下仁田	龍橘寺	○
38 38		齐田	(齐田)觀音寺	○	84 84		下仁田	常住寺	○
39 39		玉村町	飯塚	光琳寺	85 85		大塙沢黒瀧	黒瀧山不動寺	
40 40		上之手	瓶照寺	○	86 86		千原	慈眼寺	
41 41	高崎市	鳥巣町	達磨寺	○	87 87		尾尾	(尾尾)吉祥寺	○
42 42		岩巣町	(岩巣)觀音寺	○	88 88		大日向	安樂寺	○
43 43		赤坂町	(赤坂)長松寺	○	89 89		六車	大雄寺	○
44 44		石原町	(石原)清淨寺	○	90 90		天引	向陽寺	○
45 45		上並木町	天龍護国寺	○	91 91		金井	宝勝寺	○
46 46		成田町	成田山光德寺	○	92		善慶寺	福繼寺	○

報告調査 No.	地区	所在地	名称	予備 調査	報告調査 No.	地区	所在地	名称	予備 調査	
92 93	沼田市	殿治町	正覚寺	○	140 141	太田市	武良田町	長樂寺		
93 94		町田町	町田坊		141 142		岩松町	(岩松)青蓮寺		
94 95		上免知町	迦葉山龍華院		142 143		世良田町	誓持寺	○	
95 96		下川田町	東禪寺		143 144		安養寺町	明王院	○	
96 97		奈良町	正円寺	○	144 145		新田大根町	大慶寺	○	
97 98		屋形原町	寒相院	○	145 146		新田反町	照明寺	○	
98 99		白沢町高平	雲谷寺	○	146 147		大原町	全性寺	○	
99 100		利根町大原	昌龍寺	○	147 148		大原町	長建寺	○	
100 101		土出	大圓寺		148 149		堀工町	茂林寺	○	
101 102		越本	音昌寺	○	149 150		羽附町	普濟寺	○	
102 103	(利根)	東小川	龍淵院	○	150 151	館林市	朝日町	法輪寺	○	
103 104		門前	(門前)吉祥寺		151 152		練町	遍照寺	○	
104 105	片品村	立岩	清岸院	○	152 153		木戸町	常樂寺	○	
105 106		貝原瀬	川龍寺	○	153 154		下早川田町	雪龍寺	○	
106 107		糸井	清雲寺	○	154 155		仲町	般若寺	○	
107 108		湯原	建明寺		155 156		栄町	覺應寺	○	
108 109		上津	(虎左衛門地藏尊)奥之段本堂		156 157		日向町	實生寺	○	
109 110		須川	泰寧寺		157 158		笠懸町阿左美	長樂院	○	
110 111		四万	(京本寺)日向見乗御堂		158 159		笠懸町久宮	臥龍庵	○	
111 112		中之条町	京本寺		159 160		笠懸町鹿	清泉寺	○	
112 113		赤岩	上の般音堂	○	160 161		笠懸町西鹿田	長昌寺	○	
113 114	北	庄桑	常林寺	○	161 162		大間々町塙原	穴原薬師堂		
114 115		長野原町	雲林寺	○	162 163		大間々町上神梅	覺成寺	○	
115 116		千俣	(常林寺)円通殿		163 164		大間々町大間々	光榮寺	○	
116 117		嬉志村	鍾原	鍾原般音堂	164 165		大間々町桐原	世音寺	○	
117 118		大瀬	無量院	○	165 166		大間々町小平	成滿院	○	
118 119		草津町	光泉寺		166 167		大間々町小平	正福寺	○	
119 120		中山	雙松寺	○	167 168		浅原	唯晴殿	○	
120 121		高山村	法信寺	○	168 169		小平	岩穴觀音	○	
121 122		尻高	泉龍寺	○	169 170		東町小中	大善院	○	
122 123		岩下	應永寺	○	171		東町萩原	善雄寺	○	
123 124		原町	顯德寺	○	171 172		東町神戸	(神戸)清水寺	○	
124 125	桐生市	梅田町	風仙寺		172 173	明和町	中谷	教學院	○	
125 126		本町	淨運寺		173 174		大佐貫	東光寺	○	
126 127		梅田町	長泉寺		174 175		下江黒	金剛廟	○	
127 128		境野町	祥雲寺	○	175 176		新里	地藏寺	○	
128 129		梅田町	薦林寺	○	176 177		田島	能藏院	○	
129 130		川内町	(川内)觀音寺	○	177 178	千代田町	赤岩	光恩寺		
130 131		広沢町	大雄院	○	178 179		赤岩	安樂寺	○	
131 132		西久方町	青蓮寺	○	179 180		木崎	東光寺	○	
132 133		新里町山上	常広寺		181		萱野	洞源寺	○	
133 134		新里町新川	善昌寺		181 182		城ノ内	成就院	○	
134 135		新里町武井	善能寺	○	182 183		大泉町	城ノ内	龍泉院	○
135 136		新里町新川	龍真寺	○	183 184		東小泉	勢光寺	○	
136 137		黒保根町上田沢	覺光寺		184 185		邑楽町	石打	慶應寺	
137 138		黒保根町水沼	常蓮寺	○						
138 139		東今泉町	曹源寺							
139 140	太田市	脇屋町	正法寺	○						

*報告No空欄は調査実施したが現代建築等により欠番とした。

予備調査実施件数 124
 本調査実施件数 104
 (予備調査から本調査 48)

目 次

口 絵

例 言

寺院調査地区別図

目 次

1. 本 調 査：寺院建築	1
2. 予備調査：寺院建築	356
3. 付	
寺院建築用語の解説	395

本調査報告書目次

報告 No.	地区	所在地	名称	頁	報告 No.	地区	所在地	名称	頁			
1		前橋市	紅葉町2-8-15	龍海院	1	81	下仁田町	下仁田626	清泉寺	177		
2			總社町植野150	元景寺	6	84	西	大瓶沢字墨瀧甲1266	黒瀧山不動寺	181		
3			總社町總社1607	光嶽寺	10	85		千原字千原407	慈眼寺	185		
4			日輪寺町412	日輪寺	15	86	毛	星尾182	(星尾)吉祥寺	187		
5			小相木町91	大慈寺	18	89		甘楽町	天引甲1401	向福寺	190	
6			公田町544-1	乘明院	20	92	沼田市	殿治町338	正覺寺	192		
7			富士見町石井1227	珊瑚寺	23	93		町田町甲425	町田坊	198		
8			堺越町1256	圓林寺	26	94		上池田町445	迦葉山龍華院	201		
9			船川町女瀬1160	觀光寺	29	95		下川田町2550	東禪寺	205		
10			苗ヶ島町1148	(苗ヶ島)金剛寺	31	97	北	屋形原町689	寅太院	208		
11	中	伊勢崎市	華藏寺町6	華藏寺	34	99		利根町大原字大成722	昌靈寺	211		
12			山王町857	本妙寺	37	100	毛	土出886	大圓寺	214		
14			曲輪町14-5	同樂院	40	102	(利根)	東小川2900	龍勝院	217		
15			香林町1-354-1	觀音音堂	42	103		川場村	門前860-1	(門前)吉祥寺	220	
19			境上武士604	能満寺	45	105		昭和村	貝野瀬1129	川龍寺	224	
20		渋川市	渋川748	真光寺	48	107		みなかみ町	湯原985	建明寺	228	
24	毛		八木原888	清泰寺	55	108			上津807-14	(茂左衛門地藏尊)先之院本堂	231	
27			伊香保町水沢214	水澤寺	59	109			須川98	泰寧寺	233	
28			中郷庚239	雙林寺	64	110	中之条町	四方4371	(宗本寺)日向見榮師堂	237		
29			上白井3958	空惠寺	71	111	北	下沢渡494	宗本寺	240		
30			赤城町藤保沢甲99	宗玄寺	76	113		長野原町	応宗547	常林寺	243	
31			村上3892	如意寺	78	115	毛	嬬恋村	千侯1320	(常林寺)円通殿	246	
32			村上13	(如意寺)岩井觀音音堂	80	116	(利根)		鐘原492	鐘原觀音堂	248	
33		雄東村	山子田2535	柳沢寺	83	118		草津町	草津甲446	光泉寺	251	
34			長岡1247-1	東光寺	89	121		高山村	仄高甲1939	泉龍寺	253	
36		吉岡町	下野田99-1	(下野田)華藏寺	92	122		東吾妻町	岩下1655	應永寺	256	
37			漆原1284	(漆原)長松寺	95	124		桐生市	梅田町1-58	風仙寺	261	
38		玉村町	齊田435	(齊田)報恩寺	99	125			本町6-398	淨運寺	266	
41		高崎市	鼻高町296	達磨寺	102	126			梅田町4-1	長泉寺	272	
44			石原町2401	(石原)清水寺	106	128			梅田町4-528	鷹林寺	274	
46			成田町23	成田山光嚴寺	109	129			川内町5-584	(川内)觀音寺	276	
47			白岩町448	長谷寺	112	130			広沢町3-3580	大雄院	278	
49			中室町5558	(大福寺)龍不動尊堂	116	132			新里町山上291	常広寺	281	
53			翼鄰町兼明星甲22	龍門寺	119	133			新里町川田2728	善昌寺	284	
54			翼鄰町富岡852	長純寺	121	134			新里町武739	善龍寺	287	
55			引間町213	妙見寺	124	136			厚別根町上田沢字通丸326	醫光寺	290	
57			吉井町長根甲472	常行院	127	137	東		黒保根町水沼328	常麗寺	294	
58	西		吉井町神保1295	仁叟寺	129	138		太田市	東今泉町165	唐源寺	296	
59		藤岡市	岡之郷439	(岡之郷)觀音寺	133	139			臨屋町9562	正法寺	300	
60			藤岡甲317	龍源寺	136	140			世良田町3119-6	長樂寺	304	
61			矢場甲1148	廣沢寺	138	141			岩佐町609	(岩松)青蓮寺	310	
64			淨法寺甲1094	淨法寺	140	143	毛		安養町200-1	明王院	314	
67	毛	富岡市	南蛇井1133-1	般若寺	146	148		館林市	堀工町1570	茂林寺	320	
68			上高瀬1675	(光嚴寺)藥師堂	149	149			羽附町1691	普濟寺	324	
69			富岡1219	(壽福寺)成田山不動堂	152	152			木戸町甲580	常楽寺	327	
72		安中市	下秋間112	桂昌寺	155	161		みどり市	大間々町延原633	穴原藥師堂	332	
73			板鼻2-5-21	長勝寺	159	166			大間々町小平768	正福寺	335	
74			松井田町松井田甲987	(松井田)不動寺	162	171			東町神戸719	(神戸)清水寺	340	
75			松井田町新堀1186	補陀寺	166	177		千代田町	赤岩甲1041	光恩寺	343	
76			松井田町土塙2331	乾寔寺	171	179			木崎357	東光寺	347	
78		上野村	樽原甲146	中正寺	173	182			大泉町	城之内3-11-2	龍泉院	350
80		神流町	万場甲999	千手寺	175	184			邑楽町	石打甲1056	慶慈寺	353

予備調査報告書目次

報告 №	地区	所在地	名称	頁	報告 №	地区	所在地	名称	頁	
13	伊勢崎市	昭和町1645-1	天増寺	356	117	瑞志村 <small>(北毛野香妻)</small>	大篠456	無量院	376	
16		市場町1-335	大林寺	356	119		中山甲588	雙松寺	376	
17		境495	長光寺	357	120		中山585	法信寺	377	
18		境461	愛染院	357	123		原町432	頼能寺	377	
21		渋川市	渋川744	通照寺	358	127	桐生市	境野町6-268	祥雲寺	378
22		有馬1301	神宮寺	358	131	西久保町1-10-11	秀蓮寺	378		
23		上郷2919	良增寺	359	135	新里町新川1051	龍真寺	379		
25		北橘町八崎717	角谷戸蘭御堂	359	142	太田市	世良田町3201-6	總持寺	379	
26		北橘町八崎1091	雙玄寺	360	144		新田大根町甲1000	大慶寺	380	
35	榛東村	広馬場3981	字輪寺	360	145		新田反町896	照明寺	380	
39		玉村町	熊塚174	光琳寺	361	146	大原町371	全性寺	381	
40		上之手1282	緑照寺	361	147	大原町1877	長建寺	381		
42	高崎市	岩鼻町253-1	(岩鼻)緑音寺	362	150	館林市	朝日町7-10	法輪寺	382	
43		赤坂町30	(赤坂)長松寺	362	151		緑町1-2-15	通照寺	382	
45		上並木町922	天龍護国寺	363	153		下早川町1896	雲龍寺	383	
48		下室町1451	長年寺	363	154		仲町10-12	般性寺	383	
50		倉渕町水沼1303	(水沼)蓮華院	364	155		宋町1-8	覺應寺	384	
51		倉渕町三ノ倉574	全透院	364	156		日向町240	實生寺	384	
52		箕郷町西明屋甲633	妙福寺	365	157	みどり市	笠懸町阿左美2130	長壽院	385	
56		新町2523	宝勝寺	365	158		笠懸町久宮330	臥龍庵	385	
62	藤岡市	藤岡2378	光慈寺	366	159		笠懸町鹿1969	清泉寺	386	
63		東平井甲1070	円満寺	366	160		笠懸町西鹿田甲846	長昌寺	386	
65		譲原341	廣福寺	367	162	毛	大間々町上神梅152-1	覺成寺	387	
66		鬼石484	福持寺	367	163		大間々町大間々1056	光榮寺	387	
70	毛	妙義町諸戸147	隨應寺	368	164		大間々町町原336	世音寺	388	
71		安中市	安中2-7-19	龍昌寺	368	165	大間々町小平602	成讚院	388	
77		松井田町新堀1058	(松井田)金剛寺	369	167	大間々町浅原乙1373	瑠璃殿	389		
79		上野村	乙父字田平927	泉龍寺	369	168	大間々町小平1964	岩穴觀音	389	
83		下仁田町	下仁田631	常住寺	370	169	東町小中727	大善院	390	
87		南牧村	大日向甲278	安養寺	370	172	明和町	中谷145-1	教學院	390
88			六車字蘆戸山甲1500	大雄寺	371	173		大佐貢93	東光寺	391
90		甘楽町	金井375	宝勝寺	371	174		下江黒195-1	金剛院	391
91			小幡甲349	宝泉寺	372	175		新里196-1	地藏寺	392
96	北毛野香妻	沼田市	泰良町681	正円寺	372	176		田島403-4	德藏院	392
98			白沢町高平字戸ノ敷1482	雲谷寺	373	178	千代田町	赤岩1057	安樂寺	393
101		片品村	越本1267	普昌寺	373	181		城之内3-17-5	成就院	393
104		川場村	立岩464	清岸院	374	183		東小泉3-10-5	勢光寺	394
106		昭和村	糸井1261	清雪寺	374					
112		中之条町	赤岩字鍛治谷戸乙237	上の緑音堂	375					
114		長野原町	長野原73	雪林寺	375					

1 龍海院 [りゅうかいいん]

表1-1

寺社名	大珠山是寺龍海院	所在地	前橋市紅葉町2-8-15
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 龍海院
主本尊	紙迦如來	仏事	元旦(1/1)、修証会御祈祷会(12/31～)、ねはん会(2/15)、春の彼岸(3/)、花まつり(4/8)、施食会(5/第3日曜)、盆(8/13～15)、秋の彼岸(9/)、成道会(12/8)
創立・沿革	徳川家康の祖父松平清康の開基。享禄3年(1530)清康が岡崎城下撲外禪側を開山とする大珠山は寺宇龍海院を建立。家康の江戸城入城に伴い、酒井氏は川越城主となり龍海院も川越に移り、慶長6年(1601)の前橋転封により、龍海院も前橋に移軒(前橋市龍海院調査書)。		
文化財指定	前橋藩主酒井氏歴代墓地(市史跡 昭和39年12月)、下村善太郎の墓(市史跡 昭和49年8月)		

位置·配置(图1-1、写1-1)

龍海院は、前橋城趾（県庁）の南東方向1kmに位置する曹洞宗の寺院である。参道は境内東に延び、かつては参道両側に土塁が築造されていた。

元禄8年(1695)5代藩主忠拳により大規模な造営(御靈堂、本堂、護衛堂、書院、衆寮、庫裏、方丈)をおこなう。寛延2年(1749)9代藩主忠恭の時、姫路に転封となるが、龍海院は前橋に残った。文政年間(1818~1829)に大規模な伽藍の再整備をおこなう。現在の伽藍配図は、この時のものと推定される。

参道入口に門があり、その先に山門、本堂が配置されている。本堂西側に檀家の位牌堂その奥に酒井家歴代の位牌が安置された御靈屋がある。書院、庫裏、東堂寮は平成4～6年(1992～1994)に改築されている。また、平成25年(2013)、28年(2016)に庫裏が増築されている。本堂の東側に座禅道、山門、鐘楼が配置されている。墓地は本堂南側から西及び東側にかけて配置され、その中に酒井家歴代墓所、下村家墓地(初代前橋市長下村善太郎)がある。かつては境内東側に門があり、山門から本堂へ直線的に配置されていた。

由来および沿革

前橋城主酒井氏の菩提寺で、徳川家康の祖父松平清康の開基である。享禄3年(1530)清康が岡崎城下に撰外禪師を開山とする大珠山是字寺龍海院を建立した。家老の酒井正親に外護を命じ、以降、酒井氏の菩提寺となる。家康の江戸城入城に伴い、酒井氏は川越城主



図 1-1 配置図



图 1-2 平面图(本堂)

となり龍海院も川越に移り、慶長6年(1601)の前橋転封により、龍海院も前橋に移転した。

本堂 (図1-2、表1-2、写1-2~1-7)

建造年代は、棟札によれば文政12年(1829)である。

正面22.79m、側面18.94mの入母屋造、桟瓦葺、向拝付、東面、中央内外陣及び来迎柱丸柱、他は角柱となる。向拝柱几帳面、礎盤あり。平面の全体構成は、6間取りで四方縁に囲まれている。

内陣は正面6.40m、側面5.63mで、来迎柱前面半間を須弥壇、来迎柱後半間を厨子、厨子の後背両脇に張出を脇壇とする。後門として両脇に張出の脇壇



写1-1 境内全景

表1-2 本堂

建造年代／根拠	文政12年(1829)／棟札	構造・形式	正面22.79m、側面18.94m、入母屋造、平入、桟瓦葺、向拝1間軒唐破風付、向拝部屋根本瓦葺
工 匠	[大工] 棟梁：鯨井清兵衛	基 础	[外廻り] 布基礎石　[内部] 柱礎石、向拝柱石切石
軸 部	角柱、丸柱(内外陣境柱、来迎柱)	組 物	[身舎] 大斗、出三斗、実肘木　[向拝] 出組、菖蒲桁下連三斗、手挾
中 備	[身舎] 中備幕股　[向拝] 二重虹梁上に龍の透影鳳凰	軒	二軒疊垂木
妻 飾	[身舎] 二重虹梁、幕股、大瓶束菱形、懸魚	柱 間 装 置	舞良戸、ガラス障子、ガラス戸、板戸、襖
縁・高欄・脇障子	隅縁	床	[外陣] 覚敷、一部拭板張　[内陣] 拭板張
天 井	[外陣] 竿線天井　[内陣] 格天井(酒井家紋刻片喰)	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(禪宗様)、厨子
塗 装	素木	飾 金 物 等	[身舎] 釘隠　[向拝] 垂木木口
絵 画	龍之図(森 東渓)、花鳥図(森 東渓)	材 質	檜、桧、杉
彫 刻	[身舎] 檻間彫刻　[向拝] 軒唐破風、毛毬通(鳥と植物)、水引・海老虹梁(唐草絵様)、木鼻(猿、鳳凰)、中備(龍、鳳凰)、手挾　[木像] 間連大黒尊天(左 甚五郎作と伝わる)	手 挾	海老虹梁 手挾



写1-2 全景



写1-3 側面



写1-4 海老虹梁 手挾



写1-5 内外陣境虹梁



写1-6 須弥壇



写1-7 格天井

を設けている。床は内陣を拭板張とし、他は前面畳敷とする。天井は、格天井（剣片喰）である。内陣の両脇にトコ付の東序、西序の間を配する。内陣の東に内陣（中陣）を配し、その両脇は対面所である室中となる。内陣以外はすべて畳敷である。これらの室に内法を入れた外側を畳敷の廊下（広縁）とし、西側の広縁は拭板張で、南北の後半を濡縁とする。正面中央外に半間の縁と階3級を設け、側面3間の向拝としている。本堂は御靈屋、庫裏と連結している。

建築的特徴は、酒井家の菩提寺としての格式を表す式台玄関を配し、格天井や釘隠に家紋を記す。

ご本尊の釈迦牟尼に関する木札によると、運慶の作で享保2年(1717)7月に京仏師樽松長治郎が再興した、とある。

御靈屋（図1-3、表1-3、写1-8～1-10）

建造年代は、棟札によれば文政10年(1827)である。

正面10.55m、側面5.10m、土藏造（塗屋造）、屋根銅板葺となる。

正面中央間解放、西面及び北面の矩折りに位牌堂を設け、室中央前寄りに1間の須弥壇を配する。床は拭板張、南面中央鉄格子窓となり、前室は歴代住

表1-3 御靈屋

建造年代／根据	文政10年(1827)上棟／棟札	構 造 ・ 形 式	正面10.55m、側面5.10m、入母屋造、平入、銅板葺
工 匠	[大工]棟梁：武藤屋精兵衛	基 础	[基壇]自然石石積 [側廻]布基礎 [内部]礎石自然石
軸 部	入口柱：馬蹄形、丸柱、角柱、虹梁、頭貫、台輪	組 物	拳鼻付出三斗
中 備	幕板	軒	裏軒
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	嵌め殺しガラス戸
縁・高欄・監障子	なし	床	拭板張
天 井	格天井(天井繪)	須弥壇・扇子・宮殿	[須弥壇]桜宗様、側面背面合板壁(後補)
塗 装	欄間影刻(極彩色)、天井繪(極彩色) 黒 格天井：黒、素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	天井繪(花鳥風月)	材 質	檜、桧、杉
彫 刻	虹梁(唐草絵様)、木鼻(獅子、植物)、中備(老人と童、龍、蔓、菊)、木像(秋葉大権現)		



写1-8 南面外観



写1-9 虹梁唐草絵様



写1-10 木鼻 出組

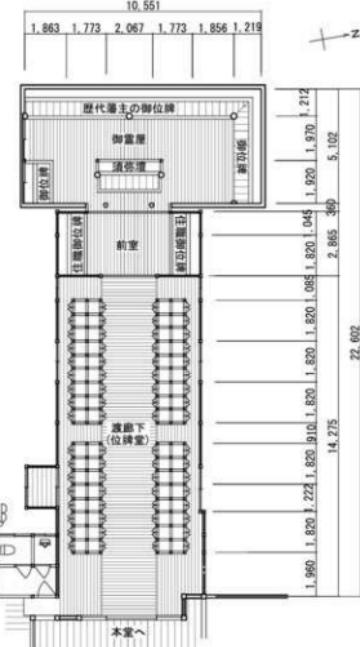


图1-3 平面图(御靈屋)

職の位牌堂を南北に配する。床は拭板張、南北1間のガラス戸となる。天井は、格天井で極彩色の天井絵で埋まっている。虹梁は、渦と若葉が一体化、複雑化しており、18世紀末～19世紀の絵様の特徴を表している。虹梁に束をたて頭貫、台輪を廻し、極彩色の彫刻をはじめ込んでいる。その上に極彩色の板支輪を廻している。束の上部に木鼻を配している。

山門（図1-4、表1-4、写1-11～1-13）

建造年代は、棟札によれば天保11年(1840)である。

3間1戸八脚門、入母屋造、棧瓦葺で立ちが高く、東面する。虹梁は、渦と若葉に花模様が入った時代的に新しい様式である。

下層は中央間両開板戸あり、両脇間及び両側面前面は嵌板、両側面後半間吹放、正面両脇間及び通路側落込、上層は正面中央両折、両脇間火灯窓、両側前面半間板戸引違窓、同後半間及び背面板壁落込となる。背面側半間通に仏壇（以前十六羅漢安置）を配す。天井は、折上天井で本堂と同じく酒井家の家

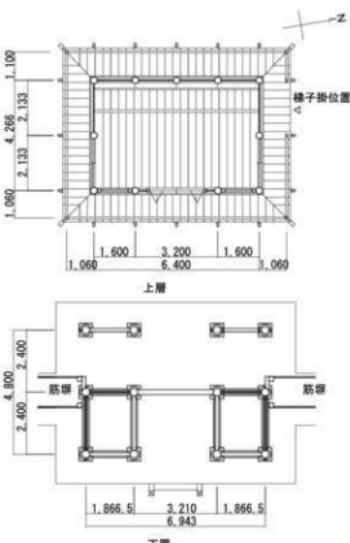


図1-4 平面図(山門)

表1-4 山門

建造年代／根拠	天保11年(1840)上棟／棟札	構 造 ・ 形 式	3間1戸八脚門(下層正面4.80m、上層正面6.4m側面4.27m 1階本柱2本を軸に2階10本を東西南北約0.27m内側に寄せている)入母屋造、棧瓦葺東面、正面南室「増長天王像」を安置。左右に筋樋付属。
工 匠	[大工] 棟梁：高桑榮吉 脇棟梁：藏吉	基 础	柱礎石方形加工石、花崗岩切石敷 正面中央石階段(斜路覆)
軸 部	[下層]丸柱、石製礎盤、虹梁、貫、台、輪 [上層]丸柱、頭貫、内法長押、台輪	組 物	[下層]出三斗 [上層]二手先、間戸東、板支輪
中 備	[下層]幕板 [上層]間斗束	軒	[下層]なし [上層]二軒繁垂木、板支輪
要 飾	出三斗、虹梁大瓶束	柱 間 裝 置	[下層]板戸両開、ガラス戸嵌戸、板壁 [上層]棧唐戸両折、火灯窓、引違板戸
縁・高欄・船脛子	擬宝珠高欄、4方切目縁	床	[下層]切石敷 [上層]拭板張
天 井	[下層]格天井、鏡天井(雲、天女) [上層]格天井(刻片喰家紋)	須弥壇・厨子・宮殿	なし(櫛：かつて十六羅漢安置)
塗 装	[下層]素木、板支輪：極彩色 [上層]素木、天井家紋：黒、板支輪：極彩色	飾 金 物 等	[下層]隅金物(棧唐戸) [上層]釘隠、隅金物(棧唐戸)、軒木口
絵 画	なし	材 質	櫛、桧、杉
彫 刻	[下層]虹梁(若葉、渦)、木鼻(渦)、幕板(雲、鶴)		



写1-11 正面



写1-12 虹梁 木鼻 幕板



写1-13 上層 格天井

紋（剣片喰）が入っている。正面南室（増長天王像）、北室（毘沙門天像）を安置す。下層からの木階は撤去、現在拭板張となる。下層からの取付は梯子にて東側高欄部へ掛ける。

まとめ

龍海院は、前橋の古くからの永い歴史の大半に関係している。前橋で150年近く藩政が続いた城主酒井家の菩提寺であり、下村家（初代前橋市長下村善太郎）の墓所もある。

県内でも有数の規模をほこる本堂、御靈屋、山門は、和様を基本とした建築様式であり、一部に禅宗様を取り入れている。

古くから伝えられてきた伽藍配置の回廊の痕跡もあり、格式の高い寺院であることがうかがえる。

龍海院は、群馬県を代表する寺院の一つであり、御靈屋建築として江戸末期の特徴を備えた貴重な文化遺産である。

（西村良子）

【参考文献】

- 『前橋市 龍海院調査報告書』前橋市教育委員会 平成4年
- 『是字寺 龍海院誌』龍海院 平成18年
- 『前橋市 建造物調査報告書』前橋市教育委員会 平成5年
- 『前橋市 文化財調査報告書』前橋市教育委員会 平成6年
- 『古絵図』群馬県立文書館所蔵
- 『酒井家史料－龍海院重要古記録（全）』複製 龍海院蔵
- 『大日本名蹟図誌 上野國之部』名古屋光影会 明治35年
- 『前橋風土記』明治39年 古市剛（昭和52年復刻）
- 『上野国郡誌4群馬郡（1）』群馬県文化事業振興会 昭和56年
- 『下馬將軍 境雅樂頭の菩提寺 龍海院』前橋学ブック レット編集委員会 平成29年

2 元景寺（げんけいじ）

表2-1

寺院名	氣雲山春光院元景寺	所在地	前橋市總社町植野150
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 元景寺
主本尊	般陀毘盧舍佛	仏事	施食会、大般若經祈禱を隔年開催（4/26）
創立・沿革	雙林寺の自然玄悦大和尚が開山し、初代惣社藩主秋元長友が、父景朝を弔うため勝山に所在した法現寺を廃寺統合し、天正15年（1587）景朝の法名「春光院殿氣山元景大居士」から山号・院号・寺号を付け開創し、天正18年（1590）秋元景朝の菩提寺として秋元長朝により本堂が建設されたと記録されている（『氣雲山元景寺誌』）。		
文化財指定	石造地蔵菩薩坐像（市重文 昭和63年8月）、秋元氏墓地（市史跡 昭和56年4月）		

位置・配置（図2-1、写2-1）

当寺は、JR群馬總社駅東方に位置し、利根川の右岸にある氣雲山春光院元景寺と称する曹洞宗の寺院である。県道15号線より分れた公道（元は元景寺の参道）を北に進むと正面に風格のある山門がある。山門を潜り整備された参道を進むと、正面に本堂と位牌堂並びに開山堂、東に庫裏を配し、右に浅間噴火の供養塔が建つ。左に鐘楼、やや離れた北に羽階権現堂と舟形光背石仏等を配置する。境内北奥の墓地内に（市指定史跡 昭和56年4月）の秋元景朝公及び正室の墓がある。

由来および沿革

『氣雲山元景寺誌』（以下、「元景寺誌」と呼ぶ）によると、開山は雙林寺十一世自然玄悦大和尚で、開基は初代の總社藩主秋元長朝公である。長朝は父景朝の菩提を弔うため、勝山に所在した法現寺と称した寺を廃寺統合し、景朝の法名である「春光院殿氣山元景大居士」から山号・院号・寺号が名付けられ、天正18年（1590）秋元景朝の菩提寺として秋元長朝により本堂が建築されたと記録されている。「元景寺誌」に記された「寺院明細帳」に本堂北に享保年間（1716～35）に建築された開基位牌堂と開山堂が

有ったと記録されているが、現在解体されその部分は竹林となっている。また鐘楼は延享年間（1744～48）に建築され、風害に依り倒壊し、現在の鐘楼は明治29年（1896）に再建されたと記録されている。また山門についても創建当時は二脚門で、入母屋造唐破風付二層柿葺であったと記録に有る、しかしこの山門も風害に依り倒壊し、現在の山門は「元景寺誌」の「表門上棟祝儀控」に文政3年（1820）に再建されたと記録されている。



写2-1 境内全景

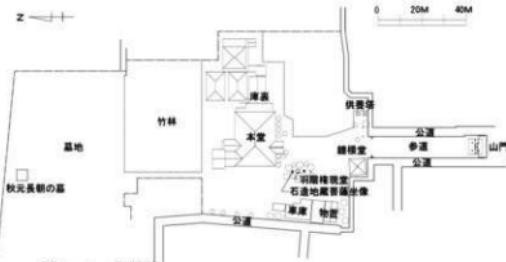


図2-1 配置図



図2-2 平面図(本堂)

表2-2 本堂

建造年代／根拠	17世紀中期／棟札	構造・形式	正面(28,29m)、側面(31,36m)、寄棟造、平入、向拝1間唐破風屋根(後補)、瓦葺、8間取
工 匠	[大工]棟梁：勢多郡八崎村 萩原長左衛門	基 础	[身舎]不明 [向拝]礎石
軸 部	[身舎]角柱、丸柱(粽付来迎柱、境4本)、内組法長押 [向拝]角柱(粽)木鼻(後補)	物	[身舎]外部・舟肘木、内外陣正面出組、内陣背面・平三斗 [向拝]出三斗
中 備	[身舎]外陣正面・出組詰組、内陣正面・出三斗 [向拝]幕股(後補)	軒	[身舎]一軒疊垂木 [向拝]二軒疊垂木
妻 飾	なし	柱 間 姿 置	アルミ引連窓、火灯窓、格狭間窓、襖、漆喰、鉄板サイディング
縁・高欄・脇障子	なし	床	[外陣、脇陣]縁 [内陣、位牌堂、秋元廟]拭床
天 井	竿縁、格天井		須弥壇・扇子・宮殿
塗 装	[身舎]素木 [秋元廟欄間彫刻]素木・部分彩色 [内外陣]彫刻、支輪、幕股)極彩色	飾 金 物 等	須弥壇
絵 画	天井絵(位牌堂)	材 質	檜、杉
彫 刻	[外陣中央左右下]・麒麟 [外陣左右中央]雁 [外陣支輪]楓・菊 [外陣虹梁]浮彫(後補) [外陣虹梁下]獅子		



写2-2 全景



写2-3 南面(火灯窓)



写2-4 向拝



写2-5 外陣から内陣正面



写2-6 内陣背面虹梁



写2-7-1・2 須弥壇裏・脇墨書

本堂(図2-2、表2-2、写2-2～2-7-1・2)

棟札に「延宝5年(1677)、勢多郡八崎村、棟梁萩原長左衛門門長」が造立したと『元景寺誌』に記録があるが、本調査時では棟札は確認できなかった。『惣社町郷土誌』に文久と明治に大改修が有ったと記録されている。その時に改修されたと考えられる墨書が須弥壇側面に「時明治二十六年癸巳年第八月日 工職 西村重吉作之」が確認された。その後昭和42年(1967)に本堂の屋根を茅葺から瓦葺に大改修され、平成14年に向拝も増築されている。本堂の構造・形式は軸部が角柱・舟肘木を設け、南面外壁は漆喰塗と簡素な仕上げをし、南面柱間装置の欄間に造立当時からある火灯窓を連ね、左右に格狭間欄間に

窓を設けている。外陣正面の水引虹梁の絵様は渦、若草共に浮彫の松が彫られ(後補)、中備に出組詰組を設け、その間に極彩色豊な麒麟、雁の彫刻を嵌め、菊・楓の彫刻支輪(後補)を設けている。須弥壇の来迎柱は丸柱粽付で、台輪・頭貫で固め、組物は出組としている。建造年代は、建築当初から有る外部南面欄間の火灯窓・格狭間窓を残し、須弥壇側面の墨書と外陣正面水引虹梁の絵様等から19世紀の様式を取り入れ大改修されたと推定する。秋元廟の位牌堂は、『元景寺誌』に記録されている位置は同じであるが当初の位牌堂の北に物置が平成18年(2006)頃増設され、それと同時に内部も改修されている。なお元景寺では、外陣を大間と称している。

山門（図2-3、表2-3、写2-8～2-10）

『元景寺誌』に記されている「表門上棟祝儀控」に文政3年(1820)に再建されたと記録されているが、本調査時に棟札等時代を証明する物は確認できなかった。山門の構造・形式は1間1戸棟門(3.50m)、側面1間(2.31m)、切妻造、平入、瓦葺の總檜造で、屋根に鰐鉾を揚げている。正面軸部は礎石角柱で、組物に出三斗、正面彫物に龍、頭貫に秋元家の五ツ木瓜の家紋を設け、側面東菱形に鯉の彫刻、西面に鶴亀の素木の彫刻が嵌められている。柱間装置は框戸両開と左脇に片開潜戸を設け、天井・

軒は格天井に二軒繁垂木としている。再建年代は虹梁の木瓜渦蔓若葉絵様(18世紀末～19世紀)の若葉が中央に長く伸びている絵様と「表門上棟祝儀控」並びに『惣社町郷土誌』の文献に記録されている文政3年(1820)を再建年代と推定する。

鐘楼（図2-4、表2-4、写2-11～2-13-1・2）

『惣社町郷土誌』によると、建物が延享年間(1744～1748)に建築され、明治17～18年(1884～1885)頃風害に合い、現在の鐘楼は明治29年(1896)に再建されたものであると記録されているが、本調査時に棟札等年代を確認する物は発見されず不明である。鐘楼の構造・形式は下層が礎石に八角柱、腰付付で、正面側面共2間(3.83m)上層は丸柱で、正面側面共1間(3.38m)、方形造、銅板葺である。上層床は板張りで、切目縁を四方に廻らし、擬宝珠高欄を設けている。虹梁上に台輪を廻し、中備に龍の素木彫刻を嵌め、天井は格天井に花鳥が描かれている。建物全体は朱塗に仕上っている。再建年代は虹梁の刻線彫り絵様の渦が菱形で若葉が比較的短いなどの絵様から18世紀中期建築当時の当初材を一部使用し、『元景寺誌』及び『惣社町郷土誌』に記録されている明治29年(1896)に再建されたと推定する。

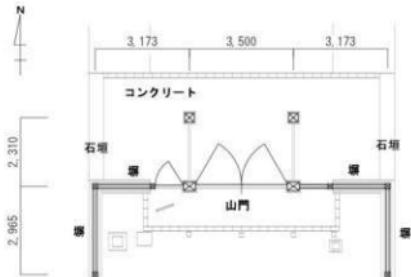


図2-3 平面図(山門)

表2-3 山門

建造年代／根据	19世紀前期／建築様式	構造・形式	1間1戸棟門(3.50m)、側面1間(2.31m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	匠 不明	基 础	礎石
軸 部	角柱	組 物	出三斗
中 備	彫刻	軒	二軒繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束、菱形	柱 間 装 置	板戸戸、脇潜戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	木口巻
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[正面]龍・秋元家家紋 [側面]木鼻、(表・龍、裏・鯉形)、菱形(東・鯉、西・鶴亀) [虹梁間]渦		



写2-8 正面



写2-9 正面彫刻



写2-10 妻飾

表2-4 鐘樓

建造年代／根拠	明治中期／建築様式	構造・形式	〔下層〕2間角(3.83m) 〔上層〕1間角(3.38m)方形造、銅板葺、脣持付
工 匠	不明	基 础	柱基礎(礎石)、脣腰基礎(布石)
輪 部	〔下層〕八角柱、足固(胴貫) 〔上層〕丸柱、虹梁、組 物	出三斗	
中 備	木鼻、台輪	軒	一軒疎垂木
妻 鋸	なし	柱 間 裝 置	片開戸、脣腰(鉄板貼り)
縁・高欄・脇障子	擬宝珠高欄、四方切目縁	床	〔下層床〕土間 〔上層鐘樓床〕板張
天 井	格天井	須弥壇、扇子・宮殿	なし
塗 装	朱塗、台輪上素木	飾 金 物 等	木口巻
絵 画	天井絵	材 質	柱(檜)、その他(不明)
彫 刻	虹梁上(4面 龍)		



写2-11 正面



写2-12 東面中備



写2-13-1・2 東・北面見上げ

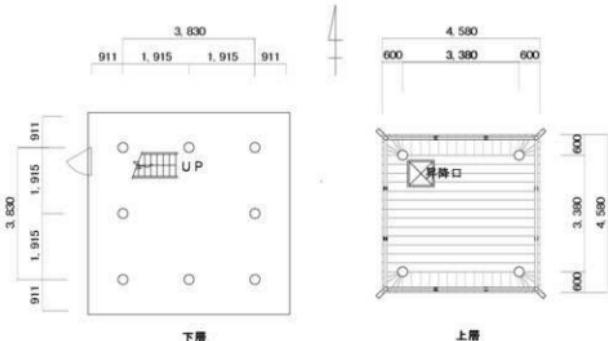


図2-4 平面図(鐘楼)

まとめ

『惣社町郷土誌』によると、本堂は創建当時から災難を逃れ、時々改修をしていたが、文久と明治に創建当時の火灯窓・格狭間窓を残し大改修されたと記録にある。現在も火灯窓と格狭間窓は旧景を保ち、大事に保存され元景寺の特徴の一つになっている。山門については文化13年(1816)に風害に合い、文政3年(1820)に再建されたと記録に有る。建物は創建当時の当初材は使用された形跡はなく再建当時の材料と推定する。現在の鐘楼は、梵鐘が昭和18年

(1943)に金属資源として供出されて以来梵鐘は無いが、建物は良く整備され保存されている。元景寺は17世紀後期から19世紀後期頃の本県の寺院建築を考察するうえで重要な遺構といえる。

(藤井宏典)

【参考文献】

『氣雲山元景寺誌』 氣雲山春光院元景寺 平成25年

『惣社町郷土誌』 惣社町役場 明治43年

『前橋市史』 前橋市役所 昭和59年

3 光巌寺〔こうがんじ〕

表3-1

寺院名	秋元山江月院光巌寺	所在地	前橋市總社町總社1607
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 光巌寺
主本尊	觀音菩薩	仏事	修正会(1/1)、元三大師護摩供(1/3)、節分会(2/3)、涅槃会(2/15)、大施餓鬼会(3月彼岸)、阿迦南誕生会(4/8)、伝教大師忌(6/4)、盂蘭盆会(8/13)、彼岸供養会(9月彼岸)、天台大师会(11/24)、除夜祭(12/31)
創立・沿革	慶長12年(1607)總社城主秋元長朝が母、光巌院のため元總社徳藏寺と七ヶ院のうち四ヶ院を總社に移して開基した寺である(『前橋市史』[元景寺誌、寺社提供資料])。		
文化財指定	光巌寺業医門(市重文 昭和50年12月)、東覚寺層塔(市重文 昭和48年9月)、光巌寺の打數・油單並びに轄(市重文 平成7年4月)、光巌寺の石轄(市重文 平成7年4月)、石山寺蔵絵机(市重文 平成9年4月)、三具足(市重文 平成9年4月)、輪口瓜形釜伝芭屋(市重文 平成9年4月)、力田造愛碑(県史跡 昭和25年6月)		

位置・配置(図3-1、写3-1)

当寺は前橋の西、利根川右岸の棟名山東南麓前橋台地、總社の地に位置する。旧佐渡奉行街道(現伊香保街道)に面する参道(現市道)を進むと楼門が見える。楼門に並び長屋門がありその先、南側に薬医門がある。薬医門を潜ると左に鐘楼、右に進むと

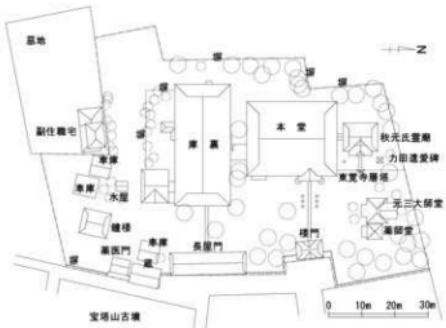


図3-1 配置図



写3-1 境内全景

左側に庫裏、本堂、秋元廟が南北に連なる。正面には元三大師堂、薬師堂が南向きに建ち並び、東覚寺の層塔や農民達が建てた頌徳記念碑「力田造愛碑」(県史跡)がある。境内は樹木に囲まれ多くの文化財があり、少し離れた墓地内にも市重文の六地蔵石轄がある。調査対象外であるが長屋門には「新造長屋門 東西式間半 南北拾間半 功成矣 天明五年乙巳歲五月初七日 秋元山第十二世豊者法印順海建之 大工棟梁馬場左近藤原福充 馬場助之進藤原福方 石工信州高遠領小原染右衛門 木挽背梨色助七・義八・源治郎・音八その他門人大工として十八人の名を記載」の棟札を残す。境内西側にJR上越線が通り、寺の東には總社古墳群を形成する国指定史跡、宝塔山古墳と蛇穴山古墳がある。宝塔山古墳の墳頂には市指定史跡秋元氏歴代墓地や歴代住職の墓地がある。

由来および沿革

慶長12年(1607)秋元氏が總社城を築き、城下町を構築するに当たり、一寺の建立を図った。当時、新寺院の建立は禁じられていたため、天海僧正により總社領主秋元越中守長朝が菩提所と定めた徳藏寺と七ヶ院の内四ヶ院を總社に移し光巌寺と称したのが始まりである。開祖は徳藏寺十三世亮応である。山号は秋元氏の姓、院号は長朝の光月院、寺号は母の光巌院殿より付けられ、秋元山 光月院 光巌寺とし母の菩提寺として開基した。明治5年(1872)徳藏寺を分離独立、放光院、宝勝院、千手院を当寺の末寺とする。

本堂（図3-3、表3-2、写3-2～3-7）

本堂再建は棟札より文政3年(1820)大工棟梁：青梨邑 馬場祐之進、馬場孫兵衛、馬場勇吉が建築、梁間9間、桁行12間と記される。又別の「本堂棟木再建の棟札」には明治20年(1887)とあり、大工西村重六、芳師羽鳥祐吉が確認される。正面11間(23.55m)、側面7間(17.40m)の銅瓦葺入母屋造

平入、六つ間、1間(4.53m)の向拝唐破風付、右手に昇堂口、本堂裏に位牌棚(共に後補)とする。外部組物は正面と左右側面3間迄が絵様肘木とし三方に縁を儲ける。妻飾りは二重虹梁大瓶束、笈形付、母屋受けは出三斗、虹梁間は平三斗詰組で意匠性を持たせている。向拝は組物を出三斗、妻飾りは大瓶束に笈形が付いているが、頭貫と虹梁間に本堂か



図3-2 平面図(庫裏)

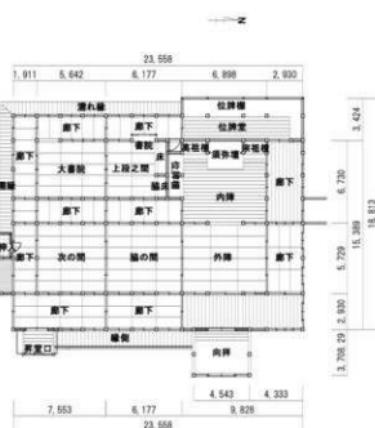


図3-3 平面図(本堂)

表3-2 本堂

建造年代／根柢	文政3年(1820)／棟札	構 造 ・ 形 式	正面11間(23.55m)、側面7間(17.40m)、銅瓦葺入母屋造平入り、六つ間、1間向拝、唐破風付、昇堂口・位牌棚(後補)
工 匠	[大工]大工棟梁：青梨邑 馬場祐之進、馬場孫兵衛、馬場勇吉	基 础	[身舎]RC犬走りのため不明 [向拝]礎石
軸 部	[身舎]角柱、丸柱(棕、来迎柱内外陣坂井4本) 内法長押、虹梁、差鴨居 [向拝]角柱(几帳面)、水引虹梁	組 物	[身舎](外部)絵様肘木、(内部)内外陣・出組 [向拝]出三斗、側面 平三斗、縁型
中 備	[身舎]轔股 [向拝]幕股	軒	[身舎]地垂木打越二軒疊垂木 [向拝]一軒疊垂木
妻 飾	[身舎]二重虹梁大瓶束、笈形、虹梁間平三斗詰組、三つ花懸魚 [向拝]虹梁大瓶束、笈形、鬼毛通	柱 間 装 置	アルミサッシ、障子、襖、笈欄間、漆喰塗
緑・高欄・船脛子	三方切目縁、組高欄	床	[外陣、脇陣]暈 [内陣]板張 [廊下・入側]暈 [向拝]板張
天 井	[内外陣・廊下]格天井、他竿縁天井		須弥壇・扇子・宮殿 須弥壇(禅宗様)、
塗 装	素木、支輪(楓彩色)	飾 金 物 等	釘頭(鏡頭、六葉)
繪 画	天井絵(内外陣)	材 質	檜、杉
彫 刻	[内部]支輪(波・花)		



写3-2 全景



写3-3 側面



写3-4 向拝



写3-5 内陣正面



写3-6 外陣虹梁



写3-7 上段之間

ら木鼻が出ていることから向拝は後の改修で付加されたものと考えられる。内部組物は内外陣ともに出組、彫刻支輪、中備は蟇股が施され、内陣は家紋、外陣は十二支と木花の天井絵が描かれている。市重文の蔵絵机は上段間に置かれ、秋元祭の時に一般公開している。屋根は昭和28年(1953)3月に改修し

ている。寺院提供の資料には本堂が茅葺であった写真がある。

庫裏 (図3-2、表3-3、写3-8～3-10)

文化10年(1813)の再建 (『文化財調査報告書第20集』による)。正面8間(13.17m)側面14間(32.96m)

表3-3 庫裏

建造年代／根拠	文化10年(1813)／檜札	構造・形式	正面8間(13.17m)、側面14間(32.96m)、瓦葺入母屋、妻入
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	角柱	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
要 飾	虹梁大瓶束 蕉懸魚	柱 間 裝 置	アルミサッシ、襖、障子、簇欄間
縁・高欄・船障子	一方切目縁、脇障子(板)	床	疊、廊下・板張
天 井	格天井、竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	釘隠
繪 画	[客殿]板戸(墨絵)	材 質	檜
彫 刻	なし		



写3-8 正面



写3-9 客殿遠櫈



写3-10 板戸墨絵

瓦葺入母屋造妻入、増築部を除いて約130坪の大規模な庫裏である。増築し内部は大改造が行われ、ビニールクロスや京壁に変わっている部分があり、外部はアルミサッシに替えてある。大広間（客殿）の床の間には脇書院があり脇床の天袋の模には芝山大納言持豊卿（文化12年／1815没）、廣橋前大納言胤定卿（天保3年／1832没）、高辻前中納言福長卿（文政2年／1819没）、綾小路少将有長朝臣（明治14年／1881没）と同時代に活躍した四人の和歌人の歌が書かれているが再建時のものと推定する。板戸には墨絵が描かれている。妻飾や外観は再建当時の面影を残している。昭和37年（1962）に屋根を瓦に改修している。寺院提供の資料には庫裏が茅葺であった写真がある。

山門（図3-4、表3-4、写3-11～3-13）

建造年は不明である。別のところにあったものを現在地に移築したものと説明板に記載されている（前橋市教育委員会）。正面1間（3.04m）側面1間（2.14m）銅板1間1戸の薬医門である。石臺上に礎石を置き角柱に女梁を差し、男梁を重ねる。その上に巻斗絵様肘木を乗せ、桁を受ける。棟木も幕股に巻斗絵様肘木で受けている。男梁の鼻先に縁型、

幕股に家紋の彫刻が唯一の装飾で簡素に造られている。男梁の鼻先縁型や丸く卷の少ない渦の絵様板幕股から江戸前期頃と推定する。

まとめ

本寺は秋元氏が総社城を築き、城下町を構築するに当たり建立を図った寺院である。境内には今回調査対象外となつた丹塗りの鐘楼門（文化年間（1804～1818）建立、元旦、節分、4/8、お盆の4回に限り開門）、秋元靈廟（文化9年（1812）再建 天井絵：八方にらみの竜 狩野法眼融川藤原寛信画）、最も古い長屋門（天明5年（1785）「文化財調査報告

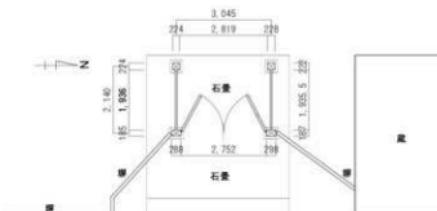


図3-4 平面図(山門)

表3-4 山門

建造年代／根柢	江戸前期／建築様式	構造・形式	1間1戸薬医門（3.04m）、側面（2.14m）、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	角柱（大面） 女梁、男梁	組 物	男梁の上に巻斗絵様肘木
中 備	板幕股	軒	一軒疊垂木
要 飾	鰯付燕懸魚	柱 間 裝 置	両開框板戸
縁・高欄・船障子	なし	床	敷石
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	楓巻金物
絵 画	なし	材 質	檜、檜、杉
彫 刻	男梁の先端部縁型、幕股（家紋）		



写3-11 正面



写3-12 裏面



写3-13 懸魚・板幕股

書第20集』等があり当時の建築を知る上で他大切な寺院である。又、東覚寺の層塔や天狗岩用水の開削水利を図り旱魃の心配なく水田耕作が出来るようになった農民らの感謝を示した「力田遺愛碑」などがある。秋元長朝公が總社町を構築する上で大きな役割を果たした事が判る總社地域、前橋の歴史上大切な寺院である。

(須田睿一)

【参考文献】

『沢明』鹿島出版 昭和46年

『文化財調査報告書 第6集』前橋市教育委員会 昭和51年

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会

昭和54年

『文化財調査報告書 第20集』前橋市教育委員会 平成2年

『文化財調査報告書 第23集』前橋市教育委員会 平成5年

『文化財調査報告書 第24集』前橋市教育委員会 平成6年

『図説・前橋の歴史』近藤義雄著 昭和61年

『公家事典』橋本政宣著

『群馬県百科事典』上毛新聞社 昭和54年

『ぐんまのお寺 天台宗Ⅰ』上毛新聞社 平成11年

『縁小路少将有長朝臣の歌碑』玉村町本陣木島家の歌碑有

玉村町教育委員会生涯学習課文化財係提供

4 日輪寺〔にちりんじ〕

表4-1

寺院名	勅定美山寺總院日輪寺	所在地	前橋市日輪寺町412
宗派	真言宗 豊山派	所有者・管理者	宗教法人 日輪寺
主本尊	木製 [†] 仁王像	仏事	元旦慶摩(1/1)、十一面觀音大祭(1/11)、春彼岸(3/)、花祭(5/8)、施餓鬼法要(5/第2日曜)、お盆(8/)、十一面觀音大祭(8/17)、秋彼岸(9/)
創立・沿革	神龜3年(726)川端村朝日窪の池より一寸八分の間浮檀金の十一面觀音像が発見され、淨所を選んで一草堂を建て安置した。大同2年(807)弘法大師諸國行脚の際立ち寄り、その像を十一面觀音の胎内に納め、十六弟子の一人実恵和尚に弘仁2年(811)開山させたのに始まるという(『前橋市日輪寺建造物調査報告書』『前橋市史』、『図説・前橋の歴史』)。		
文化財指定	十一面觀音像(県重文 昭和26年6月)、日輪寺寛永の絵馬(市重文 昭和49年8月)		

位置・配置(図4-1、写4-1)

本寺は前橋市北部の日輪寺町に位置する。国道17号から東に入り、桃の木川を渡ると左前方に見る。上武国道の開通に伴い整備されたアクセス道路を左折すると右手に楼門を見る。楼門を潜ると正面に觀音堂、すぐ裏に觀音像を守護する保存庫を見、右手に旧幼稚園舎を配す。左右に墓地を配し中門を潜ると本堂、右手に新築した庫裏、客殿を配す。本堂前には石橋を設けた池を構える。本堂裏には竹藪を擁し東側には耕作地を配し閑静な環境を作る。仁王門、觀音堂、中門、本堂が一直線に繋がる伽藍配置である。



図4-1 配置図



写4-1 境内全景

由来および沿革

当寺の創建については元亀2年(1571)の銘のある「木版縁起」に記されているが、神龜3年(726)川端邑朝日窪の池より一寸八分の間浮檀金の十一面觀音像が発見され、淨所を選んで一草堂を建て安置したことから始まるという。大同2年(807)、弘法大師遍國の際その像を木造十一面觀音の体内に納め、十六弟子の一人、実恵和尚に弘仁5年(811)開山させ、國家鎮護の寺とした。安政7年(1860)「日輪寺縁起」「文化財調査報告書 第23集」によると当時七堂伽藍が建ち並び、寺領四十町歩を賜ったとされる。寺名が町名になっているのは寺の古さを示すものである。再三の火災や洪水にあってはいる。相澤貞順(第16世)前任職によると、昔は楼門から觀音堂まで石垣が有りその両脇に池があった。明治6年(1873)日輪寺の建物を借り桃川尋常小学校開校の折、運動場とするため、東側の池は埋められ、幼稚園開園により、西側の池も埋めた。平成に入り地域の道路整備事業で道路が嵩上げされ、楼門の基壇は60cmほど下に残されている。觀音堂の基壇も同様である。

観音堂(図4-2、表4-2、写4-2~4-7)

当堂の建造年代は不明である。元亀元年(1570)再建後の戦乱期や元禄年間の大火でも無事であったことが「木版縁起」に記されていること、独立の木鼻、内部四隅の円柱金襴巻きから16世紀後期と推定する。建築様式は禅宗を基調とするが、部分的には和風が混入する。正面3間(7.36m)、側面3間(7.36m)、入母屋造銅版葺である。外陣を1間(2.20m)内陣を2間(5.17m)とし、背面中央1間に須弥壇を置く。平成19年(2007)の改修時に後陣

表4-2 観音堂

建造年代／根拠	16世紀後期／建築様式	構造・形式	正面3間(7.36m)、側面3間(7.36m)、入母屋造、平入、銅板葺、北に1間の後陣(平成19年(2007)改修時後補)
工 匠	不明	基 础	RC基礎(後補)の上礎石
軸 部	丸柱(柱上部棕)、縁長押、頭貫、縁型、台輪	組 物	出組
中 備	幕股、簷束	軒	二軒繁垂木、軒支輪
妻 飾	二重虹梁大瓶束、鰯付燕懸魚	柱 間 裝 置	蔀戸、櫟戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁	床	外陣: 板張り、内陣: 板張り、両脇脇
天 井	格天井	須弥壇・厨子・宮殿	厨子
塗 装	素木	飾 金 物 等	釘頭
絵 画	天井絵	材 質	檜、楡
彫 刻	なし		



写4-2 全景



写4-3 右側面



写4-4 絵馬



写4-5 寛永拡大表示



写4-6 内観



写4-7 厨子

を延ばす。基礎はRC造。須弥壇両脇に仏壇を構える。軸部は内外陣総丸柱とし上部に棕を付ける。縁長押、頭貫、縁型、台輪、木鼻縁形付。出組、拳鼻付、中央、側面とも中央間に幕股を置く。軒は二軒繁垂木、妻飾りは二重虹梁大瓶束、鰯付燕懸魚、柱間装置は正面三間共、上部格子組、下部舞良組の蔀戸とし右側面に引戸を設け、他は横板壁とする。四方切目縁。床は外陣板張り、内陣板張り両脇脇敷。天井は格天井、天井絵は第16世貞順による。堂内には極彩色の厨子が安置されている。両脇には馬鳴觀音、馬頭觀音不動明王、毘沙門天、聖觀音の各像が安置されている。厨子内には群馬県指定重要文化財の十一面觀音像が安置されていたが現在は1月11日、秘仏十一面觀音大祭日にご開帳される。また、絵馬は江戸期から昭和のものまであるが寛永10年(1633)銘の絵馬は市指定の重要文化財である。厨子

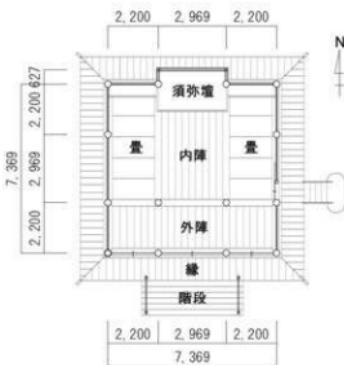


図4-2 平面図(観音堂)

はかなり改造され柱の各所に痕跡が見られる。

5266 樓門（図4-3、表4-3、写4-8～4-10）

「二王門再建立帳」「ぐんまのお寺真言宗！」の中に文化元年(1804)に再建のため募金を行った事が記されている。3間1戸の楼門は波支輪を白とし他は素木である。様式は和様を基調とするが一部に禅宗様が混入する。下層正面3間(6.53m)側面2間(3.80m)上層正面3間(5.43m)側面2間(2.72m)入母屋造銅板葺。正面1間(2.72m)両脇に金剛柵構、背面3間吹き放し。両脇間中仕切及び側面横板壁。柱は総丸柱とし上部棕付、柱間虹梁、頭貫、台輪、天井は中央鏡天井、脇間格天井、2階は頭貫、台輪、木鼻付き、四方切目縁、擬宝珠高欄、天井は竿縁天井である。虹梁に溝がないこと、木鼻形式、唐草様、撥東上の双束の配列等から19C前期

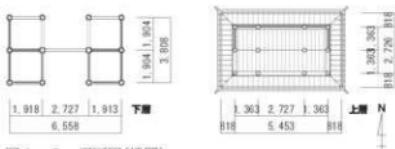


図4-3 平面図(楼門)

表4-3 横門

建造年代／根据	文化元年(1804)/「二王門再建立帳」「前橋市建造物調査報告書 平成4年・文建協」	構造・形式	下層：正面3間(6.53m)、側面2間(3.80m) 上層：正面3間(5.43m)、側面2間(2.72m) 3間1戸楼門、入母屋造、銅板葺
工 匠	不明	基礎	RCペタ基礎の上礎石
軸 部	〔下層〕丸柱(柱上部棕)、虹梁、頭貫、台輪 〔上層〕丸柱(柱上部棕)、頭貫、台輪、木鼻	組物	〔下層〕二手先 〔上層〕出組
中 備	〔下層〕撥東 〔上層〕撥東	軒	二軒垂木、飛檐隅木、波支輪
妻 飾	虹梁大瓶束、虹梁間平三斗	柱間装置	堅格子、板壁
締・高欄・船頭子	〔上層〕四方切目縁、擬宝珠高欄	床	〔下層〕土間コンクリート 〔上層〕拭板
天 井	〔下層〕中央・鏡天井、脇間・格天井 竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾金物等	なし
繪 画	なし	材質	檜
彫 刻	なし		



写4-8 正面



写4-9 右妻面



写4-10 天井

と推定する。昭和43年(1968)頃屋根は銅板葺に改修した。

まとめ

境内は、楼門から直線上に金堂、中門、本堂の伽藍配置を見る。当寺は、鉈彫りの「十一面観音像」や、「寛永の絵馬」等秘蔵する寺院であり、観音堂の周囲には江戸時代の馬頭観音の石碑も有り古くから村の生活に係わっていたことが窺える。歴史的にも貴重な建物である。

(須田容一)

[参考文献]

- 『前橋市建造物調査報告書』前橋市教育委員会 平成4年
- 『文化財調査報告書』前橋市教育委員会 昭和46年
- 『文化財調査報告書 第23集』前橋市教育委員会 平成4年
- 『文化財調査報告書 第24集』前橋市教育委員会 平成5年
- 『文化財調査報告書 第33集』前橋市教育委員会 平成14年
- 『群馬県近世寺社建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和54年

『図説・前橋の歴史』近藤義雄著 昭和61年

『平成19年改修写真集』日輪寺

『富士見村誌』富士見村編纂委員会 昭和29年

5 大徳寺〔だいとくじ〕

表5-1

寺院名	五種山一乗院大徳寺	所在地	前橋市小相木町91
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 大徳寺
主本尊	阿弥陀如来立像	仏事	地蔵尊祭(7/第4土曜日)(寺、自治会、子供会合同)
創立・沿革	元和元年(1615)法印亮尊により開山。寛文4年(1664)に災禍を被り、江戸中期に法印慈觀により旧古市村から現在地に移転し再興した。總門は正徳2年(1712)に建てられた。その後寛政10年(1798)再び災禍に遭い、現在の本堂は文化8年(1811)に再建された(「前橋市史」)。		
文化財指定	大徳寺總門(市重文 昭和39年12月)、大徳寺多宝塔(市重文 昭和48年9月)		

位置・配置(図5-1、写5-1)

前橋市街地南部から利根川西岸の東地区に架かる南部大橋を渡って旧三国街道を北に入った静かな住宅地内に本寺はある。街道に沿った水路に掛かるアーチ状の石橋の先に、市重要文化財に指定されている四脚門の總門がある。門をくぐり弓なりの石畳の参道を進むと、左手には樹木の繁った築山があり、供養塔、總門の由来を記した石碑などがある。石段の上に薬師堂、その先の石段上に地蔵堂がある。右手側は枯山水の庭と墓地があり、正面奥に灯籠、本堂が建ち、南側に書院・庫裏が続いている。

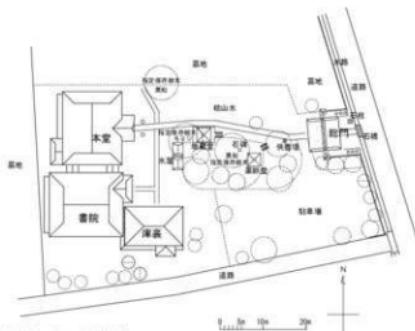


図5-1 配置図



写5-1 境内全景

本堂内には前橋市指定重要文化財の金銅製の多宝塔がある。境内に数多くある樹木の中に、築山の中ほどにある黒松、墓地側にある黒松、水星脇にあるモミジの3本が前橋市指定保存樹木になっている。總門手前右側に旧三国街道（佐渡奉行街道）の石碑（道しるべ）が置かれている。

由来および沿革

『前橋市史』によれば、元和元年(1615)法印亮尊により開山。寛文4年(1664)に災禍を被り、江戸中期に法印慈觀により旧古市村から旧小相木村の現在地に移転し再興した。總門は正徳2年(1712)に建てられ300年が経っている。その後寛政10年(1798)再び災禍に遭い、現在の本堂は文化8年(1811)に再建された。

總門 (図5-2、表5-2、写5-2～5-7)

現在の總門は、平成27～29年(2015～2017)に調査と全解体修理を行い、重厚な箱棟を持つ銅板一文字葺きに改修された。切妻造、単層四脚門で、中心となる2本の本柱が棟近くまで延び、棟柱の上部と控柱の上を海老虹梁でつなぎ、その下に前後の控柱の頭の部分と本柱を貫いて頭貫が通る「本柱（棟柱）・海老虹梁式」という県内では珍しい架構の特徴を持っている。彫刻の入った水引虹梁・海老虹

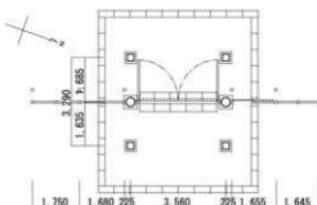


図5-2 平面図(總門)

梁、板幕股、拳木鼻、彩色された象木鼻等、骨太な軸組を持ちながらも豪華さや艶やかさも合わせ持つ、全体的に均整のとれた美しい門である。昭和30年(1955)茅葺の上にトタンを被せる屋根修理を行っている。昭和39年(1964)には市の重要文化財に指定された。境内築山にある「地獄天宮皆為淨土 有性無性齊成佛道」の石碑に、「正徳壬辰(1712)」に総門を建立した由来が刻まれている。また、「前橋の歴史と文化財」に、昭和37年(1962)頃修理をした際に、田村八兵衛の墨書が見られたと書かれている。平成の解体調査により、実寸木上端の見隠から「棟梁箱田村田村八兵衛 正徳二年(1712)」などの墨書が発見され、建造年代と棟梁名が確実なものとなつた。大工棟梁の田村八兵衛(俗称後家の八兵衛)は確かな経験と技術で評判が高く、「東村々誌」によれば、当總門の他に前箱田稻荷本宮や箱田地藏神輿などの寺社建築を手掛けたとされている。

写5-2 総門

建造年代／根据	正徳2年(1712)／石碑、墨書	構造・形式	1間1戸四脚門(3.56m)、側面2間(3.29m)、切妻造、平入、銅板一文字葺(当初茅葺)
工 匠	[大工]棟梁 箱田村(後家村) 田村八兵衛(墨書)	基 础	切石(安山岩)
軸 部	丸柱(本柱)、角柱(控柱)	組 物	(本柱上)平三斗、(控柱上)出三斗
中 備	板幕股	軒	二軒疊垂木
妻 鋲	破風板	柱 間 裝 置	門板戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	なし
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、彩色(虹梁木鼻)	飾 金 物 等	上下蓮座、門金物
繪 画	なし	材 質	漆、その他
彫 刻	水引虹梁(絵様)、海老虹梁(絵様)、木鼻(拳)、虹梁木鼻(象)		



写5-2 正面



写5-3 侧面



写5-4 裏面



写5-5 妻海老虹梁・木鼻



写5-6 組物・中備



写5-7 軒、扉上部

まとめ

「本柱(棟柱)・海老虹梁式」に分類されるこの総門は、県内文化財指定の四脚門では珍しい形式であり、江戸中期建築の門として、建造年代・大工棟梁が明らかであることは比較の指標となる価値のあるものである。現住職は、大嵐で傾いた總門に赴いた棟梁が「八兵衛が来た」と呼びかけると元通りになつたという逸話を紙芝居にし、地域の子供達に歴史的な建造物を伝えている。

(亀井直行)

【参考文献】

- 『大徳寺總門保存修理工事報告書』宗教法人大徳寺 平成30年
- 『前橋市史 第5巻』前橋市史編さん委員会 昭和59年
- 『前橋の歴史と文化財』前橋市教育委員会 昭和55年
- 『東村々誌』東村誌編さん委員会 昭和34年

6 乘明院〔じょうみょういん〕

表6-1

寺院名	公田山東明院魚遊寺	所在地	前橋市公田町544-1
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 乗明院魚遊寺
主本尊	薬師如来	仏事	新年(1/1)、不動護摩(1/28)、春彼岸回向(春分の日)、蓮開花(6月末~8月末)、蓮の会(7月初)、お盆(8/13~16)、蓮がゆ会(9月中旬)
創立・沿革	嘉祥元年(848)あるいは天安年間(857~859)に慈覚大師により開基創建		
文化財指定	廃寢動寺宝塔(市重文 昭和39年12月) 阿弥陀三尊雨像板碑(市重文 昭和48年9月)		

位置・配置(図6-1、写6-1)

乗明院は、前橋市の南部、県道高崎駒形線の昭和大橋の前橋側、前橋藤岡線との交差部から北西方向に位置する天台宗の寺院である。

境内南のかつて薬医門があった表門(現在は石門)から参道を進むと北に鐘楼門があり、鐘楼門をくぐると両脇は濠、その先の棟門を抜け境内に入り東寄り正面に本堂、西に庫裏がある。本堂北東部側に廃寢動寺にあった不動堂が移築されている。境内外周を環濠が巡り、鯉が泳ぎ、蓮が植えられている。墓地は、境内東側及び北側に配する。

由来および沿革

平安時代初めの嘉祥元年(848)あるいは天安年間(857~859)に慈覚大師が上野国に来た折、釈迦牟尼



写6-1 境内全景

仏の像を刻み、安置するお堂をつくったのが初まりという。延暦寺直末、世良田長樂寺の末寺である。末寺であった横手町の東光寺(本尊: 薬師如来)、上佐鳥町の円光寺(本尊: 地藏菩薩)、櫛島町の瑠璃光寺、公田町の覚動寺は本寺に合併し、本尊を引き継いでいる。

鐘楼門の棟札から明治19年(1886)2月屋根葺替(葺葺)(第41世暢堅代)、昭和10年(1935)2月瓦葺星根に改修(第44世興朝代)、さらに平成12年(2000)2月、シロアリや雨水による腐食から、鐘楼門を曳家工事で上げ基礎を新設、中柱2本を残して柱6本と下層部分と高欄を交換し、西に50cm移動、併せて耐震改修をする(第46世興崇代)。

表門の東西の遺濠跡から往時は二重の濠を巡らしたまさに広い寺地であったと推定される。魚遊寺の由来は、鎌倉時代にこの地方の郡司がお堂脇に池を作り、魚釣りを楽しもうとすると、水が熱湯になってしまった。了賀阿闍梨(初代住職)を招き殺生の罪をわびてお経をあげてもらうと、もとの水にもどり、また魚たちが群れをなして泳いだ。郡司は寺を再建して、公田山乘明院魚遊寺とした。

覚動寺については、伝教大師作と伝わる秘仏の不動明王が祀られ、不動堂で盛んに護摩修行が行われ



図6-1 配置図

ていたという。乗明院の1月の護摩は、それを継承したものである。第45世興仙師が覚動寺に兼務していた頃（昭和30年～40年代）は、夏8月に赴いて護摩を焚いたという。昭和大橋建設により、覚動寺は取り壊され廃寺となり、本体を移し、乗明院北東部に不動堂新築となった。合わせて石柱、常夜灯を移築した。

鐘楼門（図6-2、表6-2、写6-2～6-7）
建造年代は、棟札から明和9年（1772）と推定される。

3間1戸の鐘楼門である。入母屋造、瓦棒葺（当初は萱葺）である。下層中央の扉はない。

鐘楼門の上層小屋裏、棟木横の棟札により明和9年（1772）2月20日に47世法印暢堅の屋根替修理と昭和10年（1935）に第44世興朝代の屋根瓦葺改修の履歴が確認された。かつて鐘楼として使用され、鐘は棟

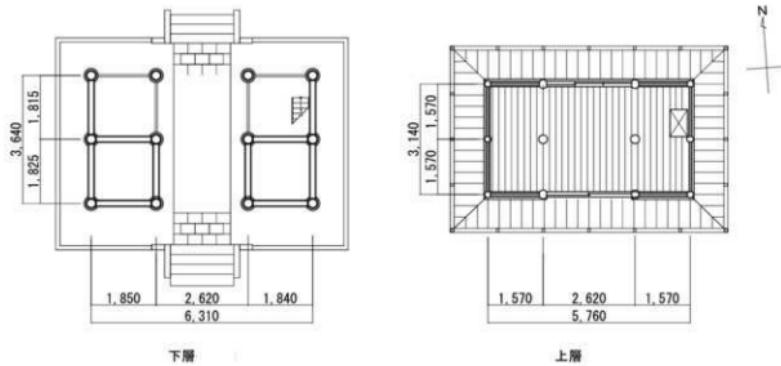


図6-2 平面図(鐘楼門)

表6-2 鐘楼門

建造年代／根拠	明和9年(1772)／棟札	構造・形式	3間1戸鐘楼門(6.31m)、側面2間(3.64m)、入母屋造、平入、瓦棒葺
工 匠	不明	基 础	後補にて基礎、礎石設置
軸 部	〔下層〕丸柱、〔上層〕丸柱	組 物	〔下層〕出組、出三斗 〔上層〕出三斗
中 備	〔下層〕間斗束 〔上層〕間斗束	軒	一軒繁垂木、平行垂木
妻 飾	拌蘸懸魚	柱 間 装 置	〔下層〕連子窓、格子窓 〔上層〕開戸、火灯窓、板壁
縁・高欄・脇障子	〔下層〕なし 〔上層〕4方切目縁、擬宝珠高欄	床	〔下層〕土間コンクリート 〔上層〕拭板張
塗 裝	なし	飾 金 物 等	〔下層〕なし 〔上層〕入八双、六葉
繪 画	なし	材 质 檢	
彫 刻	〔下層〕正面欄間彫刻 〔上層〕なし		



写6-2 全景



写6-3 侧面



写6-4 控柱 虹梁



写6-5 上層 木鼻 出組



写6-6 火灯窓



写6-7 上層 鐘吊口

木に吊す構造となっているが、戦中に供出収用されてしまっている。上層の火灯窓から禪宗様式を伝えている鐘楼門である。また、上層の木鼻、板支輪が多様化されていないなど18世紀の建築的特徴を有している。

門の左右にある像は、第45世興仙（昭和）が設置した新しいものである。

まとめ

現在は石柱になっているが、かつては総門にあたる薬医門があった。南北線上に総門（薬医門）、鐘楼門、中門、本堂が並ぶ伽藍配置は、臨済宗と通じている。かつては本寺が禪宗であった時期もあるのではないか。

また、環濠があることや配置、魚遊寺の由来に出てくる郡司の話から豪族の館だったのではないか。鐘楼門の創建時、相当の有力者がいたのであろう。でなければ造れないという来院者の話もあると聞いた。

江戸時代には寺子屋が開かれ、筆子が50人いたと

いう。第41世暢堅の墓は、筆子によって建立されている。現在、環濠には蓮が植えられ開花期には多くの人が訪れている。令和元年(2019)蓮の会を開き、令和2年(2020)蓮がゆの会を開いた。4月から5月、境内はボタンやつつじ、さつきに彩られる。

下川瀬カルタに「弥陀の絵板碑 乗明院」と取り上げられている。

乗明院は、昔から地域性を活かし、地域に根ざした人々のよりどころである。

禪宗様式を伝えている鐘楼門は、地域の象徴としても歴史的価値がある。

（西村良子）

【参考文献】

『下川瀬郷土史』明治44年

『下川瀬村誌』下川瀬村誌編集委員会 昭和33年

『下川瀬歴史シリーズ まとめ編』前橋市下川瀬公民館 平成26年

『上野国寺院明細帳 I 乗明院 東群馬郡 南勢多郡』平成5年

『乗明院不動尊開眼法則 住職提供資料』平成24年

7 瑞珊瑚寺（さんごじ）

表7-1

寺院名	石井山三光院瑞珊瑚寺	所在地	前橋市富士見町石井1227
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 瑞珊瑚寺
主本尊	阿弥陀如来	仏事	元旦祈祷(1/1)、お寺の花見会(4月)、稻荷大祭(八十八夜)、新盆と施餓鬼会(8/15)、七五三祈祷(11月)、三宝荒神祭(冬至)
創立・沿革	古名は、石井山三光院三鈷寺といい、大同2年(807)日光山を開いた勝道上人によって開創されたと伝えられている。その後400年近く無住寺であったが、正治年間(1199~1201)に尼寺となり、230~240年間尼寺として知られた。その後再び無住寺となつたが、文明年代(1469~1487)に義貫和尚(27世)によって天台宗に改め、三光院瑞珊瑚寺としたと伝えられる。文化6年(1809)上野寛永寺の直末となる(『富士見村誌』)。		
文化財指定	瑞珊瑚寺の板碑と多宝塔(市重文 昭和36年5月)		

位置・配置 (図7-1、写7-1)

赤城山南西の裾野部にあり、国道353号線(通称南面道路)を富士見町から渋川市に向かう途中の右側に位置する。古くは石居の字を用い、和銅年間(708~715)頃には石井の里と呼ばれたと伝えられている。自然の山に囲まれ、群馬百景の一つに数えられる山寺で、ツツジの名所として知られている。

南道路から本堂へ通ずる参道と右側に地蔵堂に行く二つの参道がある。左の参道を進むと右に心字池と弁天堂があり、さらに進み、階段を昇り山門を潜ると左に鐘楼、正面に本堂(昭和26年(1951)落成)がある。右の参道を進むと左に心字池、右に墓地、さらに進むと右に水屋、蓮華堂、千佛堂と並び、中

門を潜ると正面に地蔵堂がある。右脇を進み鳥居を潜り、階段を昇ると稻荷堂があり、鳥居の手前右に進むと、市重文の板碑と多宝塔がある。境内にはその他の瑞珊瑚寺の七不思議が点在している。



写7-1 境内全景



図7-1 配置図

由来および沿革

古名は三光院三鈷寺といい、大同2年(807)、日光山を開いた勝道上人によって開創されたと伝えられている。その後400年近く無住寺であったが、正治年間(1199~1201)に尼寺となり、230~240年間尼寺として知られた。その後再び無住寺となつたが、文明年代(1469~1487)に義貫和尚(27世)によって天台宗に改め、当寺を三光院瑞珊瑚寺としたと伝えられる。文化6年(1809)上野寛永寺の直末となる。現在の本堂は、昭和12年(1937)焼失後、昭和26年(1951)に再建されたものである(『富士見村誌』)。

地蔵堂 (図7-2、表7-2、写7-2～7-7)

最初の地蔵堂は、現堂宇建立棟札に、建久年中(1190~1198)に建立され、永祿年中(1558~1570)に兵火によって焼失、寛永年中(1624~1644)再建。そ



図7-2 平面図(地蔵堂)

表7-2 地蔵堂

建造年代／根拠	宝曆4年(1754)／棟札	構造・形式	正面3間(7.19m)、側面3間(7.19m)、寄棟造、平入、向拝1間、銅板葺、北側1間後補
工 匠	[大工] 棟梁：下野國芳賀郡與能村 黒崎勝右衛門	基 础	[身舎] 切石基壇、RCの基礎 [向拝] 碓石、磚盤
軸 部	[身舎] 丸柱、縁・切目・内法長押、台輪、木鼻、[向拝] 角柱(几帳面)、水引虹梁、繁虹梁(水平)、木鼻、手挾(一対)	組 物	[身舎] 二手先、内外陣出組 [向拝] 出三斗の上に一体型連三斗横上変形(二重肘木)
中 備	[身舎] 藤股 [向拝] 彫刻	軒	二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻 鋸	なし	柱 間 装 置	蔀戸、舞良戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[内陣] 板張 [外陣] 豊敷、板張
天 井	格天井	須弥壇、眉子・宮殿	眉子
塗 装	朱塗(組物、長押、身舎軸組)、黒漆(向拝柱、壁)、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	根巻金物、八双
絵 画	天井絵	材 質	檜
彫 刻	[身舎] 櫻間(波、菊・牡丹)、支輪(波、雲)、藤股(菊)、胴羽目(左: 双穴・董奉仙人、右: 菊慈童・唐子遊び布袋を引く)。正面木鼻(麒麟・犀)、背面木鼻(虎・象)、内外陣境木鼻(犀) [向拝] 正面(獅子)、側面(狛)、中備(牛若丸と弁慶)、繁虹梁上(松と鷹)、手挾(牡丹)		



写真7-2 正面



写真7-3 側面



写真7-4 向拝側面

その後、宝曆4年(1754)現堂宇の普請が行われ、棟札に大工棟梁、下野國芳賀郡與能村・黒崎勝右衛門と記されている。「富士見村誌」では葺葺であったと記されているが、その後鉄板で覆い、平成31年(2019)の大改修で銅板に葺き替えられた。

正面3間(7.19m)、側面3間(7.19m)、寄棟造銅板葺、平入、1間向拝。軒は二軒繁垂木。組物は身舎二手先、四隅に木鼻(麒麟・犀・虎・象)付で内部組物は出組、来迎柱木鼻に阿吽の犀一対が付いている。擬宝珠高欄の四方切目縁を廻らして木鼻、藤股、胴羽目、支輪に極彩色の彫刻を施し、豪華な造りになっているが、内部は素木造で簡素に仕上げている。向拝は出三斗の上に連三斗横上変形(二重肘木)で木鼻に獅子と狛、中備に彫刻が施され、水平の虹梁で身舎と繋ぎ、虹梁上の彫刻藤股に大斗で巻斗を受け、身舎の二手先拳鼻と海老虹梁を一体化的に繋ぐ独特な技法が見られる。



写真7-5 内部・内外陣境



写真7-6 左側面胴羽目彫刻



写真7-7 右側面胴羽目彫刻

まとめ

地蔵堂は、前橋藩主松平大和守の寄進により建造され、「石井瑞珊瑚寺子育地蔵」として地域の人々から親しまれ、当寺院における最古の建物である。本建物の建造年代を示す史料として、宝曆4年(1754)の棟札を残す。向拝の独特な技法や彫刻、絵様、細部意匠の特徴等から、棟札が示す宝曆4年の建造である。地方におけるお堂建築の指標となる建物で、18世紀中期以後の寺社建築の装飾化の過程を理解する上で高い価値を有する。

(難波伸男)

【参考文献】

『富士見村誌』富士見村誌編纂委員会 昭和29年

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会
昭和53年

8 養林寺（ようりんじ）

表8-1

寺院名	無量山月照院養林寺	所在地	前橋市堀越町1256
宗派	浄土宗	所有者・管理者	宗教法人 養林寺
主本尊	阿弥陀如来	仏事	初詣(1/1)、春龍上人部分会(2/3)、春彼岸(3/20)、花まつり(4/8)、盂蘭盆会(8/13~16)、秋彼岸(9/22)、大施餓鬼会(10/8)、除夜の鐘(百八会)(12/31)
創立・沿革	天正18年(1590)大胡城主牧野康成が牧野家の菩提寺として創立。開山は明譽唱空上人。慶長9年(1604)康成は所領2万石から百石を養林寺へ寄進し、御朱印地となる。江戸時代三度の火災にあい、堂塔伽藍を焼失し、創立当時のもので現存するのは山門だけである〔大胡町誌〕。		
文化財指定	牧野家墓地(市史跡 昭和50年7月)		

位置・配置(図8-1、写8-1)

養林寺は前橋市北東部の堀越町に位置する浄土宗の寺院である。荒砥川の右岸河岸段丘上で、大胡城址の北西にあり大胡城の裏鬼門に相当する。境内は南面して山門が建ち、そこから参道が北に延び本堂に至る。本堂の西に講堂、南に鐘楼、東に庫裡を配す。境内西側に墓地があり、そこに大胡城主牧野家の墓地がある。



写8-1 境内全景

由来および沿革

鎌倉時代、法然上人に帰依した大胡太郎実秀がこの地に草庵を立てたのが始まりである。天正18年(1590)大胡城主牧野康成が牧野家の菩提寺として創立。開山は明譽唱空上人である。慶長9年(1604)康成は所領2万石から百石を養林寺へ寄進することを願出て許され、御朱印地となる。併せて仏具什器一式に葵の紋を使用することも許される。江戸時代三

度の火災(宝暦4年(1754)、天明4年(1784)、天保11年(1840))にあい、堂塔伽藍を焼失し、創立当時のもので現存するのは山門だけである。本堂は昭和30年(1955)10月、庫裡は昭和37(1962)年10月、鐘楼は昭和42年(1967)、講堂昭和47年(1972)に建立。



図8-1 配置図

表8-2 山門

建造年代／根拠	江戸前期／建築様式	構造・形式	1間1戸四脚門(3.02m)、側面二間(2.57m)、切妻造、平入、鉄板葺、通用門付
工 匠	不明	基 础	自然石敷き詰め一部石製礎盤、自然石礎石
軸 部	[本柱]丸柱 [控柱]丸柱	組 物	[本柱]平三斗 [控柱]大斗肘木
中 備	本柱：挽束、絵様肘木	軒	二軒疊垂木
妻 飾	蕉懸魚	柱 間 装 置	薺座(両開き扉の痕跡)
締・高欄・脇障子	なし	床	自然石敷
天 井	化粧屋根裏	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	全体素木(柱・貫等:黒)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	桧、杉、檜
彫 刻	虹梁(絵様) 木鼻(渦)		

山門(図8-2、表8-2、写8-2~8-7)

山門の建造年代は、頭貫木鼻、実肘木の絵様から江戸前期とする。「群馬県近世社寺建築緊急調査報告書」に「柱など一部の部材は風触が激しく、頭貫の木鼻なおも江戸初期の古式を留めるものがあるが、建立年代は、そこまで遡ることはなかろう」と記述されている。一方、「大胡町誌」に天正18年(1590)~元和4年(1618)とあり、建築様式からも江戸前と推定できる。

規模は1間1戸四脚門、切妻造の鉄板葺で、東に切妻造一間の通用門が付く。屋根は茅葺屋根の形状に合わせた鉄板葺により量感のある形状で、妻飾りには蕉懸魚を付す。軸組は本柱(棕付)上に大棟から控柱

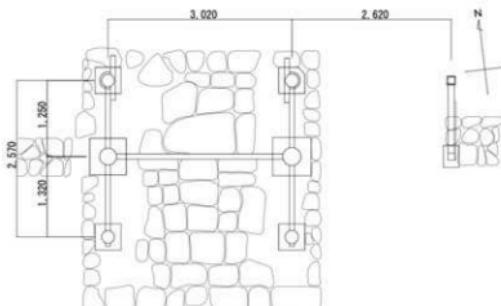


図8-2 平面図(山門)



写8-2 全景



写8-3 背面・側面



写8-4 本柱・控柱木鼻(渦)



写8-5 絵様肘木(渦)



写8-6 実肘木(渦)



写8-7 薺座(下部の痕跡なし)

丸桁に掛けた地垂木さらに飛檐垂木の二軒疎垂木となる。この山門は本柱、控柱すべて丸柱であり、切石上に建ち地貫、腰貫、頭貫（冠木）と男梁、女梁により固める。頭貫（冠木）の内側両端に薺座があり、下部には痕跡が残っていないが、かつては開き門があったことが伺える。本柱上部の肘木絵様は単純な渦であり、本柱・控柱頭の木鼻は単純な縁型である。

まとめ

養林寺は、大胡城主牧野家の菩提寺として創立され、かつては太田の大光院、館林の養導寺とともに、「上野三壇林」の一つとして、末寺2寺、境内1,943坪の広大な寺域により寺勢を極めた。大胡城

廃城後も100石御朱印地を領有していたが、近代に明治政府へ上地し、戦後の農地解放により7町歩の山林田畠を開放し經營が厳しくなった。

山門は部材の風蝕は進行しているが、中世の門の特徴を残しており県内においても貴重な建築物である。旧大胡町では最も古い建築物であった。

（南雲啓二）

【参考文献】

- 『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和53年
- 『大胡町誌』大胡町誌編纂委員会 昭和51年
- 『上野国郡村誌2 勢多郡（2）』昭和53年
- 『上野国寺院明細帳1 東群馬郡 南勢多郡』群馬県文化事業振興会 平成5年
- 『大日本宝鑑 上野名蹟図誌 四巻』昭和59年

9 龍光寺（りゅうこうじ）

表9-1

寺院名	赤城山龍光寺	所在地	前橋市柏川町女瀬1160
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 龍光寺
主本尊	薬師瑠璃光如来（木像座像）	仏事	理趣分祈祈祷会、年賀受（1/1～3）、世話人初会議（1/中旬）、開山会（1/21）、高祖降誕会、參禪会（1/26）、釈尊涅槃会（2/15）、春季彼岸会（3/18～24）、釈尊降誕会（4/8）、豊川天大祭典（5/5）、開基会（5/14）、末護持会（7/末）、お盆会（8/13～16）、秋季彼岸会（9/20～26）、両祖忌（9/29）、達磨忌、參禪会（10/5）、大施食会（10/16）、太祖降誕会（11/21）、損心会（12/1）、護持会（12/中）、報恩感謝大法会、除夜の鐘（12/31）
創立・沿革	天正10年（1582）頃、女瀬城主新井団吉守刑部右衛門が開基した。文禄3年（1594）三河国豊川妙厳寺9世大胡長興寺開山の天室伊堀禅師を招いて開山とする。（群馬県近世社寺建築緊急調査報告書、柏川村誌）		
文化財指定	女瀬城跡（市史跡 昭和49年4月）		

位置・配置（図9-1、写9-1）

龍光寺は、前橋市東部の柏川町に位置する曹洞宗の寺院である。県道前橋大間々線の女瀬交差点を500mほど北上し左折した先に、また、上毛電鉄新星駅の南東方向約500mの距離に境内を構える。境内に沿って桂川が流れ、参道は桂川を超えて本堂へ通じている。

境内は前橋市指定史跡である女瀬城跡の一郭龍光寺曲輪にあり、谷が深い桂川を超えて参道の先に本堂（正面）を配す。本堂の北に開山堂、北に庫裏、東に鐘楼が建ち、南方向に墓地が広がる。本堂北の豊川天（稻荷）も境内に含まれている。豊川天の西にも墓地がある。

由来および沿革

天正10年（1582）頃、女瀬城主新井団吉守刑部右衛



図9-1 配置図

門が開基した。文禄3年（1594）三河国豊川妙厳寺開山の天室伊堀禅師を招いて開山とする。

当初、臨済宗の寺として女瀬字木下に創建された。戦国時代末に女瀬城主の新井氏により城郭の一郭に菩提寺として移され、その際に曹洞宗に改宗された伝承がある。

本堂（図9-2、表9-2、写9-2～9-7）

本堂の建造年代は、外陣大間境の虹梁の唐草絵様から18世紀前期と推定する。

本堂は、正面16.09m、側面11.98m、寄棟造で鉄板葺（当初茅葺）である。平面の全体構成は8間取りで、西側の廊下から開山堂へ通じている。南側には、縁が付く。

東の前面の室列は中古の改造によるものと思われる。北側には後補の脇室があり、台所脇から庫裏へ通じている。土台をみると中古材を再利用しているようにも見える。柱にはぞ穴や風蝕などの痕跡があり、かなりの改修が行われたとみるべきである。軒がせがい造りであること、各室の柱が角柱であるこ



写9-1 境内全景

表9-2 本堂

建造年代／根据	18世紀前期／建築様式	構造・形式	正面16.09m、側面11.98m 寄棟造、平入、 鉄板葺(当初茅葺)、せがい造
工 匠	不明	基 础	コンクリート基礎、自然石礎石
軸 部	土台、角柱、内法長押、天井長押	組 物	[外部]なし [内部]内陣まわり、禅宗様平三斗
中 備	轆轤	軒	せがい造り
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[正面]両開きサッシ [側面・背面]ガラス戸 サッシ、板壁
縁・高欄・脇障子	濡縁	床	[外陣]疊敷 [内陣]拭板張
天 井	[外陣]格天井 [内陣]竿縁天井	須弥壇・厨子・宮殿	[須弥壇]禅宗様須弥壇 [厨子]正面1間、側面1間入母屋唐破風付
塗 装	[軸部]黒・素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	櫻、楳、杉
影 刻	[外陣]水引虹梁 [内陣]木鼻、轆轤		

と、内法長押が回っていること、長押上が白壁など住宅的な改修となっている。

卷之九

龍光寺は、女瀬城主新井家の菩提寺として女瀬城跡の一郭に配されている。

寺社建築のせがい造は、住宅建築のせがい造より古く、格式の高いお寺に使われていると言われている。

龍光寺本堂は、住宅様式を多く取り入れた本堂建築として特徴があり、たいへん貴重な建築である。

(西村良子)

【参考文献】

『群馬県近世社寺建築緊急調査報告書』 群馬県教育委員会
昭和52年

「上野国郡誌2 勢多郡」群馬県文化事業振興会 昭和53年
「上野国寺院明細帳」群馬県文化事業振興会 平成5年
「柏川村誌」柏川村誌編集委員会 昭和47年

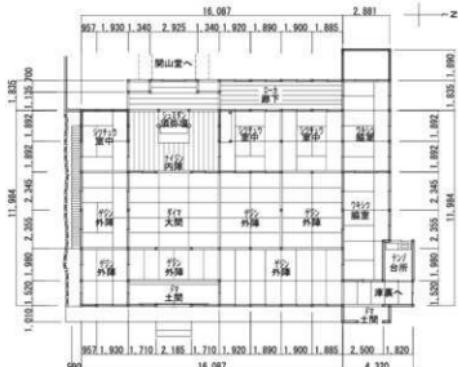


図9-2 平面図(本堂)



五 9-2 金属



五 9-3 側面



图 9-4 内外墙柱·框架



写9-5 自然石基座、土台



写9-6 柱の痕跡



写9-7 せがい造

10 (苗ヶ島)金剛寺 ((なえがしま)こんごうじ)

表10-1

寺院名	豊松山歎喜院金剛寺	所在地	前橋市苗ヶ島町1148
宗派	真言宗豊山派	所有者・管理者	宗教法人 金剛寺
主本尊	十一面觀世音菩薩(木像)	仏事	御年頭(1/1)、彼岸(3/9/)、盆行事(8/13~16)、新盆遙り(8/14)、新盆の法話(8/15)、秋の定例行事(10/)、除夜の鐘(12/31)
創立・沿革	開山は承安年間(1171~1175)赤城山大通龍に創建し、次いで寺山に移り、慶長から元和(1596~1624)の頃第4世圓義上人の代に現在地に移建した。		
文化財指定	金剛寺の石幢(市重文 昭和53年4月)、石殿(おびんづる様)(市重文 昭和53年4月)、赤城塔(並木道祖神)(市重文 昭和53年4月)、石殿(開山円義上人の墓)(市重文 昭和54年4月)、金剛寺木像十一面觀音坐像(市重文 昭和54年4月)、金剛寺の縣仏(市重文 昭和54年4月)、金剛寺の本堂の欄間影刻(市重文 昭和58年6月)、金剛寺の宝印塔(市重文 昭和60年2月)、金剛寺の石造五層塔(市重文 昭和60年2月)、東宮鐵男大佐の墓(市史跡 昭和53年4月)、金剛寺の双体道祖神(市重有民 昭和53年4月)		

位置・配置(図10-1、写10-1)

金剛寺は、県道上神梅大胡線の馬場町交差点から県道三夜沢国定停車場線を約700m北上した東側に位置する真言宗豊山派の寺院である。赤城山南面中腹の境内地は全体的に北から南に傾斜し、平地に伽藍が配されている。境内東側に柏川が南下し、西側には苗島神社がある。

長い表参道（約160m）を上ると正面に本堂、東に庫裏（昭和27年建替）、本堂の南東に鐘楼が位置する。本堂西側から東側に前橋市指定重要文化財の石造物等がある。明治31年(1898)に参道を改修した。

戦前の金剛寺の所有地は境内1,233坪、境外7町9反余り、壇徒は1,095人（昭和3年4月28日）の県内でも有数の規模の寺院であった。



図10-1 配置図

境内南側に屋敷を構える東宮家（東宮惇允家は群馬県文化財研究会特別貴重文化財に選定）は、代々金剛寺の総代を務める旧家であり、隣接地に東宮家の墓所がある。



写10-1 境内全景

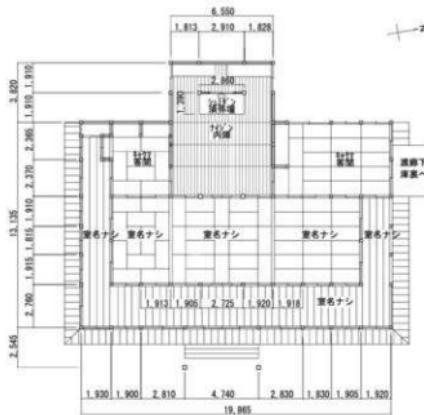


図10-2 平面図(本堂)

由来および沿革

開山は承安年間(1171~1175)赤城山大通龍に創建し、次いで寺山と呼ばれる地に移り、慶長から元和(1596~1624)の頃第4世円義上人の代に現在地に移建した。宝暦7年(1757)9月25日に焼失し、同10年(1760)第7世智海阿闍梨和尚が再建した(「宮城村誌」)。また、天和元年(1681)3月世祖円義代、宝暦6年(1756)春焼失、宝暦11年(1761)落成した(寺伝)とも伝える。法流開山は、六波羅普門院(真言宗智山派)であった(寺伝)。その後、京都の醍醐寺派報恩院末寺であったが、明治29年(1896)奈良県長谷寺の末寺となり、現在に至る。

本堂(図10-2、表10-2、写10-2~10-7)

建造年代は、唐草模様からみて18世紀後期から19世紀前期と推定される。

本堂は正面19.86m、側面13.13mの寄棟造金属板葺である。間取りは前面土間6室の平面形式を取り、須弥壇後方に安置棚、内陣の左右に書院を配し、右手に庫裏を接続する。須弥壇に本尊の木像十一面觀音坐像を安置し、内外陣境欄間に開口文治郎の龍の彫刻がある。須弥壇は禅宗様一部和様で、彫刻はもちろん須弥壇全体を開口文治郎の作と伝える。また、棟札は、確認できなかった。天井絵の森霞巖は、前橋藩お抱え絵師森東漢の次男であり、市内の玉泉寺等に襖絵、欄間絵等を残している。

表10-2 本堂

建造年代／根柢	18世紀後期～19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面(19.86m)、側面(13.13m)寄棟造、平入、向拝1間、金属板葺
工 匠	不明【欄間】開口文次有信、門人同苗千次保仙、同松次二郎、星野静次郎、黒田喜太郎	基 础	切石積2段、基礎、土台、(後補)
軸 部	【向拝】角柱【外陣廊下境】角柱【内外陣境】丸柱【外陣廊下境】角柱	組 物	【向拝】舟肘木、大斗肘木、出三斗、連三斗【身舎】肘木
中 備	【向拝】平三斗【身舎】板幕股、双斗	軒	【正面】二軒繁重木【側面】一軒疊重木【背面】一軒疊重木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	【正面】引違、ガラス戸【側面】引違ガラス戸、白壁【背面】白
縁・高欄・脇障子	大床三方	床	【内陣】拭板【外陣】疊敷【廊下】拭床
天 井	【内陣】格天井、支輪(彫刻)【外陣】格天井、天井絵、支輪彫刻【他室】竿縁	須弥壇・厨子・宮殿	【須弥壇】和様【厨子】なし
塗 裝	素木、檜彩色(手挾、彫刻板支輪)	飾 金 物 等	【須弥壇】和様【厨子】なし
繪 画	天井絵(森霞巖 明治33年11月)	材 質	釘頭、六葉、柱部なし
彫 刻	【欄間】透彫(龍)【身舎】【向拝】木鼻(漢)、虹梁(絵様)		櫛、檜、杉、栗



写10-2 全景



写10-3 側面



写10-4 海老虹梁



写10-5 水引虹梁木鼻



写10-6 欄間彫刻(表)



写10-7 欄間彫刻(裏)

まとめ

金剛寺には、内外陣境欄間に閑口文治郎(1731～1807)の龍の彫刻があり、格天井には森霞巖が絵を描いている。市重文に指定されている欄間彫刻の裏面墨書きは、「當國勢多郡 苗ヶ嶋村 金剛寺住 寛隆代 同国同郡上田沢姓 御公儀御棟梁内 閑口文治有信花押 門人 同苗 千次保仙 同 松次郎 星野勝次良 黒田喜太良」と記されている。閑口文治郎は、妻沼の聖天宮、榛名神社などに彫刻が残るこの時代の著名な彫刻師である。この墨書きの銘にある寛隆は、本寺第11世寛隆〔文化6年(1809)4月

没〕であり、欄間彫刻がつくられたのは、少なくとも第11世寛隆の没した1809年以前と推定される。

赤城山を背景に広大な敷地を有している境内には、市指定文化財が多数残っており、この地域の自然とともにある金剛寺は、大変貴重な建築物である。

(西村良子)

【参考文献】

『宮城村誌』宮城村役場 昭和48年

『志田住職提供資料』金剛寺

『上野国郡誌2勢多郡』群馬県文化事業振興会 昭和53年

『上野国寺院明細帳』群馬県文化事業振興会 平成5年

11 華藏寺【けぞうじ】

表11-1

寺院名	註 ¹ 林山淨 ² 土院華藏寺	所在地	伊勢崎市華藏寺町6
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 華藏寺
主本尊	軋 ³ 三 ⁴ 座 ⁵ 像(釋迦牟尼如來、文殊菩薩、普賢菩薩)	仏事	年始め初護摩(1/1)、大般若転読(1/10)
創立・沿革	貞觀14年(872)、比叡山第5世天台座主「智證大師円珍上人」がこの地を選び伽藍を創建。その後長く荒廃したが、文治年間(1185~1190)世良田山長乗寺の栄朝禪師に願い修復、建久年間(1190~1199)旧觀に復す。寛永年間(1624~1644)權大僧都了翁が台密と禪の兼宗を天台宗に改めた(寺伝)。		
文化財指定	華藏寺のキンモクセイ(国天記 昭和12年6月)		

位置・配置(図11-1、写11-1)

旧伊勢崎市の北、北部環状線が粕川を渡る八鹿大橋から西二つめの交差点を北に進むと華藏寺の山が目に入る。華藏寺公園として親しまれる山の東面に参道が延び、奥に境内を構える。境内は小高い山の中腹にあり、門を通り境内に進んだ正面に本堂が西に振れて南面して建つ。本堂右手に書院と庫裏を構え、書院正面に脇門が立つ。本堂裏には枯山水の石庭を設え、背景に竹林と山林が広がる。

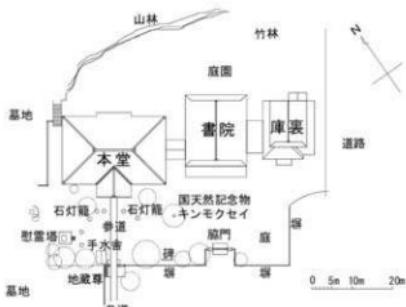


図11-1 配置図



写11-1 境内全景

由来および沿革

貞觀14年(872)玉体安穏の願いより東國巡錫に出た比叡山第5世天台座主「智證大師円珍上人」が、鎮護國家の道場として、この地を選び伽藍を創建した。末寺15ヶ寺を有した古刹大寺であった。その後長く荒廃していたが、文治年間(1185~1190)世良田山長乗寺の栄朝禪師に願って(赤石城主額田庄司經義祈願)寺院を修復し、建久年間(1190~1199)に旧觀に復したと言われる。よって栄朝禪師を中興の祖と仰ぐ。寛永年間(1624~1644)權大僧都了翁が台密と禪の兼宗を天台宗に改めた(寺伝による)。

本堂(図11-2、表11-2、写11-2~11-7)

当寺には4枚の棟札があり、天保8年(1837)の本堂再建(本編資料編161頁参照)、明治18年(1885)の本堂修繕、昭和12年(1937)の本堂修繕、平成12年(2000)の本堂修繕のものである。本堂再建の棟札には12間と8間半と規模を記すが、現本堂とほぼ同規模であることから、また裝飾性が高く手の込んだ細部の造りから、当本堂は、棟札通り天保8年の建築

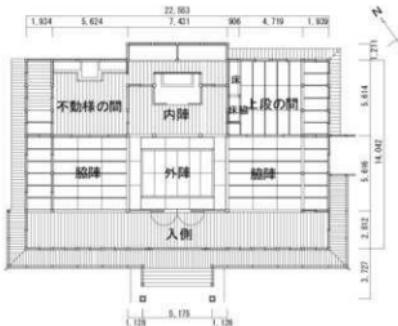


図11-2 平面図(本堂)

と判断される。また棟札には大工棟梁、脇棟梁等の名前を記す他、向拝彫物師として、新田郡山之上村（現、太田市山之神町）の川岸亦八の名を記す。

建物は、正面22.53m、側面15.25m、寄棟造銅本瓦葺で、軒唐破風付の向拝1間を持つ。再建当初は茅葺であったが、その後桟瓦葺へ、さらに銅本瓦へ葺替えている。軸部は石場建て、長押、頭貫、台輪で固め、組物は平三斗である。向拝の唐破風の反り

が大きく、水引虹梁の唐草絵様は装飾化が進み、側面木鼻の獅子頭は正面を向く。兎毛通の鳳凰の素木彫刻や、大瓶束菱形の瑞雲と流水の彩色された彫刻は、大胆かつ手の込んだ造りである。

内部平面は、方丈形式6間取りである。正面に入側があり奥中央に外陣、その奥に内陣を配す。外陣両側は脇陣、内陣両側は不動様の間と上段の間である。細部意匠を見ると内部欄間に嵌め込まれた極彩

表11-2 本堂

建造年代／根拠	天保8年(1837)／棟札	構造・形式	寄棟造、平入、向拝1間軒唐破風付、銅本瓦葺(当所茅葺)、正面22.53m、側面15.25m
工 匠	[大工] 棟梁 松村與平次(当国佐位郡伊與久村)、脇棟梁 源右エ門(八間村)他、[彫工] 向拝彫物師 川岸亦八(當国新田郡山之上村)(棟札)	基 础	自然石
軸 部	[身舎] 角柱(外周、外陣廊下境柱)、丸柱(来迎柱、内外陣境柱)、長押、頭貫、台輪 [向拝] 角柱、水引虹梁、海老紅梁	組 物	[身舎外部] 大斗上平三斗 [身舎内部] (来迎柱上部) 平三斗、(内外陣境) 出組、(外陣廊下境) なし [向拝] 出連三斗二段積上変形
中 備	[身舎内部] (来迎柱上部) 嵌込彫刻、(内外境) 嵌込彫刻	軒	一軒半繁垂木
妻 鋲	なし	柱 間 裝 置	[正側面] 引違アルミサッシ [背面] 板壁
縁・高欄・監勝子	三方切目縁、正面擬宝珠高欄、登高欄	床	[入側] カーペット [内陣] 拭板、他は畳敷
天 井	[外陣] 桁天井(花鳥天井画)、他は竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	押捺様須弥壇、扇子(宮殿)
塗 装	素木造、極彩色(欄間彫刻)、朱・黒・白・緑塗り(外陣等虹梁)	飾 金 物 等	なし
繪 画	外陣天井画(4枚中2枚は金井研香の作)、内陣正面欄間に彩色画(天女)	材 質	檜、杉
彫 刻	[入側] 欄間彫刻、虹梁 [外陣] 四面欄間彫刻、虹梁、幕股、彫刻板支輪 [西の脇陣] 欄間彫刻、虹梁 [東の脇陣] 欄間彫刻、虹梁 [内陣] 欄間彫刻、台輪上嵌込彫刻(雲に鶴) [向拝] 水引虹梁(絵様)、木鼻(獅子)、丸桁(絵様)、丸桁上大瓶束菱形(瑞雲、流水)、兎毛通(鳳凰)、柱(地紋彫)		



写11-2 正面



写11-3 向拝正面



写11-4 外陣正面



写11-5 内陣正面



写11-6 入側



写11-7 脇陣

色高内彫りの彫刻は見事であり、さらに外陣では墓
股や天井板支輪も彫りの深い極彩色の彫刻で飾り、
格天井には44枚の花鳥の天井画を嵌める。内陣では
正面両側に飛天の彩色画、琵琶板に極彩色彫刻を嵌
める。

まとめ

平安時代初期に天台座主により創建された古刹で
ある。典型的な方丈形式の平面で寄棟造で立ちが高
く、堂々とした外観を呈する。反りの大きな唐破風
向拝の装飾化が進んだ細部意匠や大瓶束笠形の彫刻
は、江戸後期の様相を伝え目を見張るものである。
内部では特に外陣を豪華な造りとし、欄間や墓股、
天井板支輪を極彩色の彫刻とし、格天井を組む。内
陣でも須弥壇の極彩色龍彫刻、飛天の彩色画や琵琶

板の極彩色彫刻等高い装飾性を示す。当本堂は優れ
た細部意匠を持ち、江戸後期の様相を良く伝えてい
る。

また棟札に記す彫物師川岸亦八は、花輪の彫物師
石原吟八の弟子である大里郡（現、熊谷市）川原明
戸村の飯田仙之助の弟子で、熊谷市妻沼の歓喜院貴
惣門（国重文）や沼田市の正覺寺山門（市重文）を
手掛けている。さらに外陣格天井の44枚の天井画の
内20枚は、島村出身の南画家、金井研香の作である。

（栗原昭矩）

【参考文献】

『伊勢崎の社寺建築』 伊勢崎市 昭和58年

『天台宗丘林山淨土院華藏寺 伊勢崎市文化財資料集2』

伊勢崎市教育委員会 平成20年

12 本妙寺〔ほんみょうじ〕

表12-1

寺院名	鷲林山本妙寺	所在地	伊勢崎市山王町857
宗派	日蓮宗	所有者・管理者	宗教法人 本妙寺
主本尊	界曼茶羅本尊(報施牟尼佛)	仏事	鬼子母神祭(11月／第4土曜日、日曜日)
創立・沿革	鎌倉時代文永年間、三光院法印鷲林阿闍梨を開基とし、大國阿闍梨正法院日朗菩薩を開山とする日蓮宗の古刹である。北関東における唯一の法華発跡の道場であったと伝える(「本妙寺略縁起」)。		
文化財指定	本妙寺鬼子母神堂(市重文 平成28年3月)		

位置・配置(図12-1、写12-1)

本妙寺は伊勢崎市の南に位置する日蓮宗寺院である。東側参道を西に進み、境内の山門をくぐった正面に本堂が、その南に鬼子母神堂が東面して建つ。北に書院、檀信徒休憩所、庫裏、南に天神堂、鐘楼を配置、庫裏と書院南を庭園とし、境内南側一部を緑地とする。境内西側に広い墓地を配置する。

由来および沿革

本妙寺略縁起によれば、文永11年(1274)日蓮の高弟日朗は、流罪中の日蓮の赦免状を持って佐渡に向かう途中、当地天神堂で休憩した。この時院主鷲林阿闍梨は、法華経の妙理を聴き日朗の弟子となっ

た。日朗は鬼子母神像を置いて行き、帰路再び立ち寄ると鷲林阿闍梨はすでに没した後で、日朗は日蓮直筆の曼茶羅をかけ弔ったという。



写12-1 境内全景

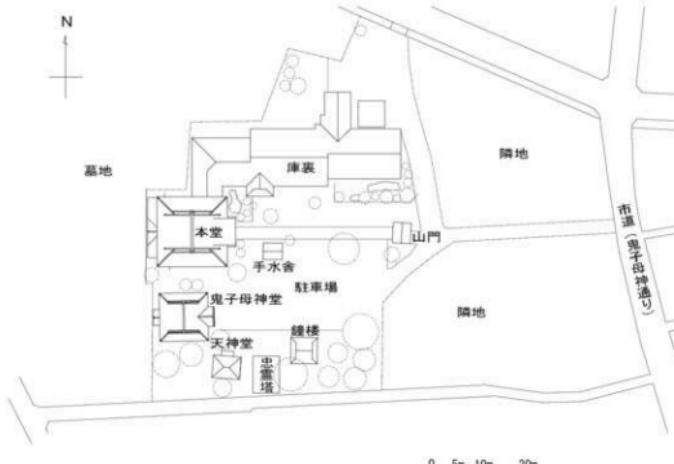


図12-1 配置図

鬼子母神堂 (図12-2、表12-2、写12-2~12-7)

鬼子母神堂の創建は明らかでないが、「名和村郷土誌」に「慶長七壬寅年(1602)酒井雅楽頭忠世ノ臣根岸友右衛門信房、福嶋与市右衛門定則ノニ氏創

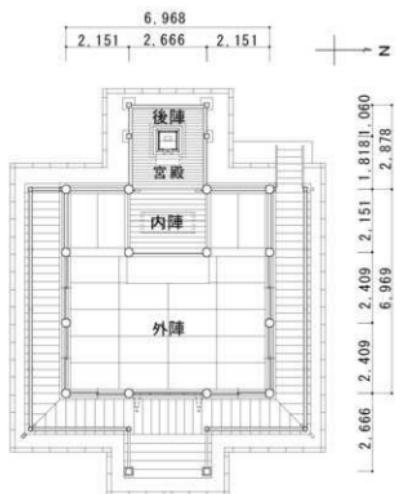


図12-2 平面図(鬼子母神堂)

表12-2 鬼子母神堂

建造年代／根拠	明和9年(1772)／棟札	構造・形式	入母屋造、平入、向拝1間軒唐破風付、瓦葺、正面3間(6.96m)、側面3間(6.96m)
工 匠	[大工]棟梁：井上幸助藤原定近(小此木村)他、 [彫工]彫物師：深澤軍八藤原規式(勢田郡田面 村)、中貞寫八勘十(山田郡天沼村)、[木挽]天 田八彌(小此木村)他(棟札)	基 础	独立コンクリート基礎(昭和60年)
軸 部	[身舎]丸柱、地貫、差鷲居、頭貫、台輪 [向 拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手扶	組 物	[身舎外部]拳鼻付出組 [身舎内部](外陣)拳 鼻付出組(内陣)出三斗 [向拝]拳鼻付出三斗 2段
中 備	[身舎]本幕股 [向拝]嵌込彫刻	軒	二軒繁重木、板支輪(彫刻)
妻 飾	二重虹梁大瓶束、薦懸魚	柱 間 裝 置	[正面]兩折棟唐戸、舞真戸引連 [側面]舞良 戸引連、板壁 [背面]板壁
縁・高欄・脇障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄	床	拭板の上疊敷、内陣中央拭板
天 井	[外陣]格天井 [内陣]鏡天井	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇、扇子(宮殿)
塗 装	素木、極彩色(向拝彫刻、手挟、隅尾垂木)	飾 金 物 等	棟戸附：飾丁番金物
絵 画	[外陣]天井画(花鳥風月、人物)、[内陣]天井画 (鳳凰、龍、唐獅子)、良寛青春山谷得(墨書)	材 質	櫻、杉
影 刻	[身舎外部]虹梁(唐草絵様)、木鼻(滴)、拳鼻(満)、彫刻板支輪(波)、隅尾垂木(丸彫盤)、本幕股(花) [向拝] 虹梁(草花絵様)、軒唐破風、鬼毛通(龍と波)、木鼻(獅子、猿)、中備(雲と龍、雲と飛天)、手挾(牡丹蘿) [身 舎内部]虹梁(唐草絵様)、拳鼻(満)、本幕股(花) 彫刻板支輪(波)		

之」とある。

現在の鬼子母神堂は、棟札より明和9年(1772)の再建である。棟札では棟梁、脇檩梁、大工の他に、彫物師として勢多郡田面村の深澤軍八藤原規式、同門弟山田郡天沼村の中島貞八勤是を記す。この深澤軍八は、妻沼聖天山本殿の彫刻棟梁として腕を振るったと言われる上州花輪の石原吟八郎の直弟子である。門弟の中島貞八との仕事としては、尾島町堀口の賀茂神社本殿の彫刻銘に2人の名が残されている。

その規模は正側3間、側面3間の小堂で、西側に後陣を増築している。内部は一室で手前2間を外陣、奥1間を内陣とし内陣に須弥壇、後陣に宮殿を置く。組物は、外部および外陣を拳鼻付出組、内陣を拳鼻付出三斗とし、中備は本幕股、軒は二軒繁垂木で、妻飾りは二重虹梁大瓶束である。

彫刻は、向拝軒唐破風毛毬通、向背水引虹梁木鼻の唐獅子と狛、向拝中備の龍、向拝妻飾飛天^{*}、隅尾垂木の丸彫の蟹^{*}、手挾の籠彫の牡丹^{*}、本幕殿の花、彫刻板支輪の波と、鴨居から上の部材の多くに施されている (*印は極彩色)。また外陣格天井には花鳥風月と人物が、内陣鏡天井には龍などの水墨画が描かれ、絵師「良寛齋春山宣得画」と記している。



写12-2 正面



写12-3 向拝正面



写12-4 向拝木鼻



写12-5 向拝海老虹梁



写12-6 外陣正面



写12-7 外陣天井

まとめ

管見であるが、本妙寺鬼子母神堂は群馬県における鬼子母神堂として、その建造年代を江戸時代に遡る事が出来る唯一のものである。鬼子母神堂としての建築的特異性を見ることは出来ないが、伊勢崎市内に残る堂宇建築としては、安堀町の普光寺本堂〔貞享年中(1684~1688)建築〕に次ぐ建築年を有し、棟札から建築年が判明する最古の例である。また鬼子母神は古くから児女を護る善神として信仰され、子宝や子育てが祈念されてきたが、年中行事として行われている子育て鬼子母神祭は、秋祭りとし

て地域の風物詩となっている。鬼子母神堂を日常的に使い守り続ける人々がいて、寺の祭礼や年中行事が地域に根付いている中に息づく貴重な仏堂建築である。さらに上州花輪系の彫物師の流れを汲む工匠として深澤軍八とその弟子中島貞八2名の判明は、花輪系彫物師の足跡を辿る上でも貴重な建物である。

(栗原昭矩)

【参考文献】

『本妙寺鬼子母神堂 調査報告書』伊勢崎市歴史的建造物
調査委員会 平成27年
『伊勢崎の社寺建築』伊勢崎市 昭和58年

14 同聚院（どうじゅいん）

表14-1

寺院名	白華山同聚院	所在地	伊勢崎市曲輪町14-5
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 同聚院
主本尊	釋迦牟尼如来(座像)	仏事	施食会(8/16:送り盆)、坐禅会(12/1~7)
創立・沿革	平治元年(1159)赤石城主三浦義明、臨濟宗赤石山同聚院創建。元徳2年(1330)新田義貞修造、新田郡金龍寺住職を兼務、この時臨濟宗を曹洞宗に改宗。引治元年(1555)矢場村(太田市)の恵林寺二世天意長朔を中興開山、山号を白華山とする。天正18年(1590)金龍寺移転、以来恵林寺の客末派となる(寺伝)。		
文化財指定	同聚院の武家門(市重文 昭和41年4月)、文明の石幢(市重文 昭和48年3月)、関当義・重慶父子の墓(市史跡 昭和48年3月)、同聚院の大カヤ(市天記 昭和42年2月)		

位置・配置(図14-1、写14-1)

JR伊勢崎駅から南西300mほどの位置にあり南北に走る武家門通りの西側に境内が広がる。東向きに仁王門(新築)、その奥に本堂、庫裏、合祀堂、坐禅堂、靈骨殿が並ぶ。市指定重要文化財の武家門は当初仁王門真東通り沿いにあったが、仁王門の新築に合わせて北側に移築されている。庫裏前に文明の石幢、庫裏裏に大カヤがあり、本堂裏(西側)には広大な墓地を配する。

由来および沿革

平治元年(1159)赤石城主三浦義明が一字を城中に創建、臨濟宗の智海和尚を開山として赤石山同聚院と称したのが始まりという。元徳2年(1330)新田義貞が修造を加え、新田郡金龍寺の住職を兼務させた。この時臨濟宗を曹洞宗に改めた。引治元年(1555)矢場村(太田市)の恵林寺二世天意長朔を中興開山として、山号を白華山に改めた。金龍寺は天



写14-1 境内全景

正18年(1590)に常陸国牛久に移転したため、以来恵林寺の客末派となった(寺伝による)。

武家門(図14-2、表14-2、写14-2~14-7)

建造年を伝える資料は残されていないが、伊勢崎藩年寄(家老)関重延が著した地誌『伊勢崎風土記』では、「今の寺邸は古昔の郭内にして寺門は即ち城門なり」(原漢文)とあり、初代伊勢崎藩主石垣平右衛門長茂の屋敷門と伝えている。長茂が入封したのは慶長6年(1601)であり、元和2年(1616)越後国藤井に転封となっている。自然石礎石の上に石場立ての柱、太い杉の構造材、風食が進んだ部材、装饰性の無いところから、江戸前期の建築と推定する。なお、市内最古の木造建築物として市重要文化財に指定されている。

建物は正面を東に向ける3間1戸の四脚門である。小屋組形式は屋敷門等で多く使われる、棟木通りと本柱通りがはずれた薬医門の形式であり、本柱を4本立て内外前後に控柱を2本、計4本立てる。控柱は正面側には1.10m出し、背面側には間柱を立て

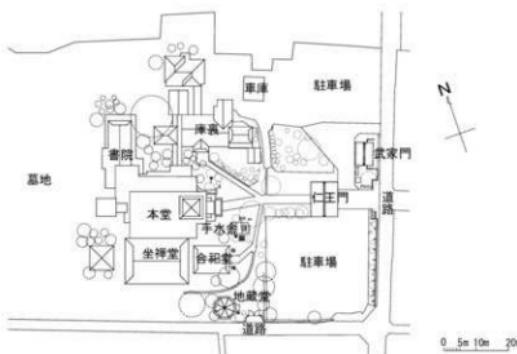


図14-1 配置図

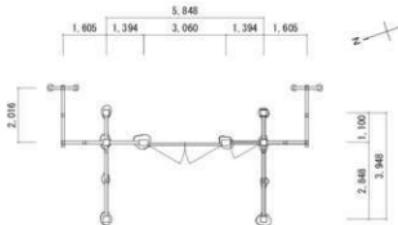


図14-2 平面図(武家門)

2.84m出し壁を付けるという特異な軸組形式を持つ。また両側に袖塀を備える。装飾性は無く全体的に簡素な造りであるが、大きな部材による力強い構えは、建造年の古さを伝えている。

長6年(1601)、稻垣平右衛門長茂が伊勢崎藩の初代藩主となり城下町の整備に尽力するが、その屋敷門と伝えられるのが当武家門である。その造りは特異な軸組形式を持ち、装飾性ではなく、16世紀後期から17世紀前期頃の武家の門の時代性・地域性を探る上で貴重な建物である。近傍では同時代の類例を見るることは出来ないため、さらなる検証のための今後の研究を待ちたい。なお同聚院の境内には、伊勢崎藩の近世やそれ以前の歴史を伝える貴重な歴史資産が多く残されている。また本堂は鉄筋コンクリート造2階建で、昭和39年(1964)に建替えられたものであるが、市内最初の鉄筋コンクリート造本堂である。

(栗原昭矩)

まとめ

武家門は同聚院の總門である。江戸時代初めの慶

表14-2 武家門

建造年代／根拠	江戸前期／建築様式	構 造 ・ 形 式
工 匠	不明	基 础 自然石礫石
軸 部	[本柱]角柱 [控柱]角柱	組 物 なし
中 備	なし	軒 芥廉木
妻 飾	なし	柱 間 装 置 [中央間]門扉框戸鏡板張 [南脇間]潜戸 [北脇間]板壁
縁・高欄・監障子	なし	床 土間
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿 なし
塗 装	素木	飾 金 物 等 なし
絵 画	なし	材 質 杉
彫 刻	なし	



写14-2 正面



写14-3 側背面



写14-4 妻面



写14-5 内部天井



写14-6 正面軒廻り



写14-7 正面南脇間潜戸

15 曜觀音堂 [あさひかんのんどう]

表15-1

寺院名	贊観音堂	所在地	伊勢崎市香林町1-354-1
宗派	なし	所有者・管理者	香林一丁目区
主本尊	如意輪觀音像	仏事	春祭り(4/8)、初参り(12/3)
創立・沿革	奈良時代、行基、弘法の2僧がそれぞれの時代に日光よりの途中うらのある大木に休んだ折、うらの中に見つけた石に秘文を唱えると観音様に変わった。その後老僧がその観音様を尊んでお祀りするとこの地が繁榮すると伝えられ、木造の如意輪觀音像を開眼し安置するためにはお堂を建立したとある。贊観世音堂縁起にある元文5年(1740)よりも古いものであると思われる(赤塚町誌)。		
文化財指定	香林の石造観音菩薩坐像(市重文 平成6年4月)、香林の木造如意輪觀音像(市重文 平成6年4月)		

位置・配置(図15-1、写15-1)

旧赤堀町、現在は伊勢崎市東北部にあり、国道50号線伊勢崎市西久保交差点を北方面に1.5kmほどの所にある交差点北西の角にある。敷地南の入口より入ると左に地区の山車庫、北に地区公民館があり中央は広場となっており、入口よりすぐ南側にこのお堂がある。また、公民館東に守社の樺神社がある。

由來および沿革

「曇觀音堂縁起」によると建造年は不明であるが、この地に名などない頃、奈良時代に行基・弘法大師尊が関東修行のおり日光山よりの巡幸の途中、の木（華の木と呼ぶ）の根元にて休んだ時仏の様子が青石があった。それに秘文を唱えると観音様になったとされる石仏がある。これが「石造観音菩薩像」また、ある時、老僧が立ち寄り木の洞に観音菩薩の靈像があるのを見て願わくは、この郷を香の林と呼び字を花の木と号し、住民の心を一つにしてこの観音様を尊び勤行すれば末永く繁栄する地になるであろうと言われた。その後木造如意輪観音座像を開眼し安置された。現在のお堂（鞘堂）はその時のものではない。

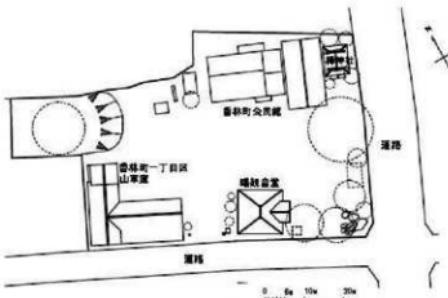


图15-1 配置区



写15-1 境内全骨

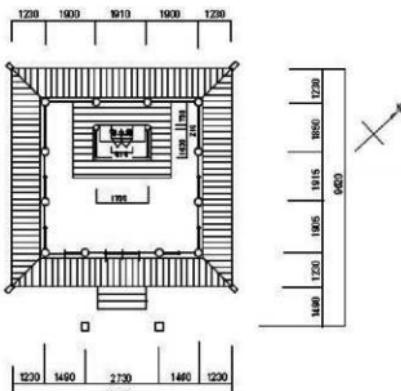


图15-2 平面图(略视音堂)

あさひかんのんどう
曙 觀音堂 (図15-2、表15-2、写15-2~15-7)

建築は元文5年(1740)と棟札にあるとされるが今回の調査では確認していない。大工棟梁は深澤彦八郎、手伝いとして足尾長五郎とある。規模は正面3間、側面3間銅板平葺(当初茅葺)軒唐破風付1間の向拝が付いている。堂の東西南北を縁が回り内部は1間造で正面に禅宗様の須弥壇、そこに幅3尺ほどの厨子が載り、その中には市の指定文化財の木造如意輪観音座像が祀られている。その須弥壇脇に同じく指定文化財の石造観音菩薩座像が祀られてい

る。身舎と来迎柱は粽付丸柱で向拝柱は地紋彫の角柱があり、組物は身舎外部が出組、内は出三斗とし、来迎柱には出三斗、向拝柱出連三斗2段積上変形である。中備は身舎外部の正面中央は詰組で、他は本轍股、内部は中央間のみ組物で他にはなく向拝は龍の彫刻を嵌める。軒は禅宗様で典型的な二軒扇繁垂木が作られ蛇腹支輪が組まれる。彫刻は、向拝の水引虹梁、丸桁、海老虹梁に唐草絵様、木鼻は正面が獅子、側面が狛である。中備に龍、丸桁上に天女、兎毛通しに飛龍が彫られている。絵画は来迎柱

表15-2 曙觀音堂

建造年代／根拠	元文5年(1740)／棟札	構 造 ・ 形 式	寄棟造、平入、向拝一間軒唐破風付、銅板平葺、正面(5.68m)、側面(5.67m)
工 匠	[大工] 棟梁：深澤彦八郎、手伝い：足尾長五郎	基 础	不明
軸 部	[身舎] 上部粽付丸柱、[向拝] 角柱、[来迎柱] 粽付丸柱頭貫上台輪、地・内法長押、頭貫上台輪(内外)	組 物	[身舎外部] 出組、[身舎内部] 出三斗、[向拝] 出連三斗2段積上変形、[来迎柱] 出三斗
中 備	[身舎外部] 正面中央のみ組物 他：幕股、[身舎内部] 中央間組物、[向拝] 彫刻嵌込(龍)、[来迎柱]組物	軒	二軒扇垂木(繁垂木)
妻 鈞	なし	柱 間 裝 置	[正面] 中央舞良戸上部格子、両脇舞良戸、[側面] 舞良戸 他板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、高欄	床	拭板
天 井	板張	須弥壇、厨子、宮殿	禪宗様須弥壇、厨子
塗 裝	素木、朱・青(水引、海老虹梁)、来迎柱廻り、 虹梁、台輪、組物、彫刻(極彩色)	飾 金 物 等	なし
繪 画	[来迎柱] 両脇虹梁上板壁に獅子の絵あり	材 質	[柱] 檜、その他不明
彫 刻	[身舎] 正面虹梁(唐草絵様)、来迎柱頭貫、肘木、 脇虹梁(唐草絵様)、[向拝] 水引虹梁、海老虹梁、丸桁(唐草 絵様)、木鼻(正面獅子、側面狛)、中備(龍)、丸桁上(天女)、兎毛通し(飛龍)		



写15-2 正面



写15-3 側面



写15-4 向拝



写15-5 海老虹梁



写15-6 身舎組物、扇垂木、蛇腹支輪



写15-7 須弥壇、来迎柱廻り

両脇と虹梁上板壁に獅子の絵が残る。絵師名は不明である。

まとめ

由来によると、行基弘法二尊師により見出された石像が始まるとされ、宗派に属さないが地域住民により大切に守られてきたことで、現在に残された事は、意味がある。向拝と身舎との関係が虹梁などに彫られた唐草文様等に時代に差異を感じる。身舎は蛇腹支輪や蔓股が古式を伝えていることなどから元文5年(1740)と明記の棟札は妥当であると思われ

る。向拝は絵様、渦の若葉くっついている事や彫刻の堀の深さなどから同後期と思われる。特に身舎正面水引虹梁、中備、頭貫上の彫刻は見事である。軒のせがいは見えないが当初は茅葺と思われる。以上の事から身舎が元文5年向拝はもう少し時代が下がる様に見える(18世紀後期)。内に祀られる木造如意輪観音座像も見事な彫と彩色が施されている。

(福田峰雄)

【参考文献】

『赤堀町誌』赤堀町 平成16年

19 能満寺〔のうまんじ〕

表19-1

寺院名	鹿児島山虚空藏院能満寺	所在地	伊勢崎市境上武士604
宗派	新義真言宗	所有者・管理者	宗教法人 能満寺
主本尊	虚空藏菩薩	仏事	修正会／年始受け(1/1)、春彼岸中日施餓鬼法要(春分の日)、お盆燈明授与、秋彼岸中日法要(秋分の日)、月例不動護摩(毎月28日)
創立・沿革	長和元年(1012)に快尊法印が栃木県足利市の鶴足寺から法流を分流して開山する。のちに新田三談林(僧侶の学校)の一つとして地域の僧徒を教育し、常法談林中本寺と呼ばれるようになった(寺伝)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図19-1、写19-1)

西側近くを南流する柏川と、東流してきた広瀬川が南方で合流している。北方には東武伊勢崎線が走り、東方に境町駅がある。南面、東面、北面は市道と接しており、南北に長い参道がある。西面と南面一部は高齢者複合施設と面している。東西に走る両側の市道沿いに石門が立ち、両脇が樹木で覆われた

長い参道の先の正面に本堂がある。参道を進むと門と塀があり、門の先の西側には閻魔堂、不動堂、鎮守社があり、墓地が広がる。本堂東側は庫裡で、庫裡の裏には書院がある。書院の東と裏庭に池がある。境内の北側は樹木で囲われていて、地蔵菩薩石像や石塔が点在している。

由来および沿革

近世には20ヶ寺以上の末寺を有する本寺となる。宝曆10年(1760)第34世恵寛法印の代に京都御室仁和寺宮西方院を兼帯し院家格を賜る。文化3年(1806)の火災により堂宇、記録、宝物は一部を残しほぼ焼失した。文政4年(1821)第43世中興榮鑑法印の代に現在の本堂が再建。平成24年(2012)に創建毫千年法要がおこなわれた。



図19-1 配置図



写19-1 境内全景

1. 本調査：寺院建築

本堂（図19-2、表19-2、写19-2～19-7）

寺伝によると文政4年(1821)に本堂を再建した。その際、赤城山から檜を一直線に引っ張ってきたとも伝わる。明治42年(1909)に萱葺を瓦葺に改修した。共に工匠は不明である。大正4年(1915)に外陣の格天井等を造作した。大工は内田喜平、彫刻師は尾島町の高橋貴一である。高橋貴一(1875～1938)は、宮内庁彫物師を勤めた尾島町の高沢改之助(1833～1891)に師事した。22歳の頃に世良田の八坂神社の額殿に、縦3m、横3.7mの献額を奉納している。内外陣境中央の欄間彫刻の裏に墨書による記名があり、40歳の頃のもので、彫刻文化を伝えるものとして貴重である。同じ頃に彫刻の寺としても有名な柴又帝釈天の帝釈堂内殿の彫刻にも携わったと

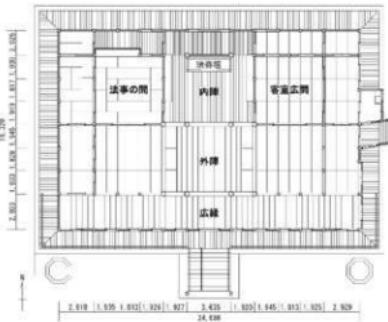


図19-2 平面図(本堂)

表19-2 本堂

建造年代／根拠	19世紀前期／建築様式	構造・形式	正面24.68m、側面16.32m、寄棟造、平入、瓦葺(当初萱葺)
工 匠	建立時は不明 [彫工]彫刻師 尾島町 高橋貴一／墨書き(大正4年(1915)造作)	基 础	コンクリート製基礎1段、礎石(切石)
軸 部	[身合]角柱、地甃、長押(切目、内法)、貫(腰、飛、頭)、差鶴居、台輪、丸柱(来迎柱、内外陣境柱、外陣広縁柱)、八角形柱(内外陣境隅柱)、丸柱八角形柱(混合(外陣広縁境隅柱))	組 物	[身合外部]平三斗2段積上、実肘木、舟肘木(北面) [来迎柱上部、外陣、広縁外陣側]拳鼻付組出組
中 備	[身合外部]幕股(下段)、斗と実肘木(上段) [来迎柱上部、外陣、広縁外陣側]幕股 [外陣中央間]詰組	軒	二軒繁垂木
妻 鋸	なし	柱 間 裝 置	[外周部]ガラス戸、舞良戸、ガラス欄間、塗壁 [内部]欄間(簇、菱、彫刻)、襖、幕戸、障子、塗壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄(正面と側面一部)	床	拭板張、骨組
天 井	[外陣]格天井 [外陣以外]竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	裸宗様須弥壇
塗 装	全体的に素木、朱塗(木負、茅負、隅木、丸桁)、漆彩色(天井支輪)	飾 金 物 等	隅木端部、外部内法長押端部、擬宝珠、高欄釘隠、隅縁萬
繪 画	なし	材 質	檜
彫 刻	[身合外部]虹梁型差鶴居(刻線彫・沈影 菊水)、拳鼻、絵様肘木(刻線彫 溝紋様)、幕股(肩・脚 刻線彫 唐草紋様、脚内 地紋彫 線格子紋様)、幕股(全体 浮彫葉) [内部]欄間(透影 龍3体)、迦陵頻伽、天女、簞笥、王子喬、琴高等)、幕股(肩・脚 刻線彫 溝紋様と脚内 地紋彫 線格子紋様)、天井支輪(浮彫 桜・波・瑞雲、菊・波・瑞雲、楓・波・瑞雲、杜若・波・瑞雲)、虹梁型差鶴居(刻線彫・沈影 牡丹、梅、菊水、唐草紋様)、頭貫(地紋彫 花菱紋、入子菱紋、算木菱紋)、台輪(地紋彫 紗綾形紋、算木菱紋、入子菱紋)、拳鼻、絵様肘木(刻線彫 溝紋様)		



写19-2 正面



写19-3 侧面



写19-4 外部組物



写19-5 内陣



写19-6 外陣欄間彫刻



写19-7 外陣格天井

も伝わる。

規模は正面24.68m、側面16.32mの寄棟造桟瓦葺で大規模である。内部は6間取で全周に広縁を回す。前面から広縁、外陣、内陣と並び、内陣の西側は法事の間で、東側は客室広間である。庫裡とは東側で接続する。建物の北面と西面は塗壁になっているが、元々は正面と同じように建具が使われていた。

組物は外部が平三斗2段積上である。上段は通肘木で、拳鼻と実肘木が付く。北面は舟肘木である。来迎柱上部、外陣内側、広縁外陣側は拳鼻付出組である。外部の中備は、下段が幕股で、上段は斗と実肘木からなる。来迎柱上部、外陣内側、広縁外陣側の中備は幕股で、外陣中央間は詰組である。櫓の素木造や、虹梁などの彫刻の特徴は、この地域の19世紀前期の建築様式をよく表している。

まとめ

新田三談林の一つとして地域の僧徒を教育し、常法談林中本寺となった建物の大きさを知ることがで

き貴重である。建物の規模は大きく、境内に近づくと屋根が山のように見え、建ちが高いのが本堂の特徴である。屋内には大きな空間が広がり、天井高さは4.62m、外陣まわりの虹梁型差鶴居は高さ750mmある。新田三談林には他に世良田總持寺と大根大慶寺があり、創立に足利の鶴足寺との関わりが深いという共通点もある。總持寺の本堂は規模が近く、天明年間(1781~89)の建造と推定され、正面22.58m、側面16.05mである。談林の規模の一例が分かる。大慶寺の本堂は、昭和2年(1927)の建造で、規模は異なる。

建造年代は、櫓の素木造や彫刻の特徴からも19世紀前期と推定でき、寺伝と相応する。

(島崎重徳)

【参考文献】

『能満寺写真集 創建毫千年記念』高橋良昭 平成24年
『ぐんまの寺 真言宗II』上毛新聞社 平成13年

20 真光寺〔しんこうじ〕

表20-1

寺院名	威徳山無量壽院真光寺	所在地	渋川市渋川748
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 真光寺
主本尊	阿弥陀如来立像	仏事	御年始、節分会(2/3)、涅槃会(2/15)、春彼岸、花祭り、お盆、秋彼岸、施餽鬼会(10/15)、除夜の鐘
創立・沿革	平安時代のはじめ慧覺大師によって草創されたと伝えられている。白井長尾氏が白井城主に任せられた際に当寺を祈願所として境内に阿弥陀堂を建立し、応永年間に比叡山の敷海法印が住して開基とされ、当代まで64代の法燈を保っている。江戸時代には第18世秉承が權正に補され、天台宗関東5箇寺の1つに数えられている(『渋川市の文化 真光寺』)。		
文化財指定	真光寺万日堂(市重文 令和元年6月)、洪鑑(県重文 昭和27年11月)、木形彌太(県重文 昭和27年11月)、真光寺の一石造地蔵菩薩像(市重文 昭和47年10月)、真光寺涅槃団(市重文 平成19年1月)、木暮足翁の墓(市史跡 昭和57年5月)、岩銭職の聖德太子塔(市史跡 平成7年11月)		

位置・配置(図20-1、写20-1)

当寺は、利根川と吾妻川が構成した河岸段丘に発展した市街地の中心部に位置している。三国街道と



図20-1 配置図



写20-1 境内全景

佐渡奉行街道の合流するこの周辺は、古い町並みで当寺のほか3寺院と神社や学校が点在している。四ツ角西の中之町から狭隘な道を北に進んで並木町に入ると左手に大門がある。境内は広く、本堂と庫裏を中心とした北側の建物群と南側の万日堂を中心とした建物群で構成されている。大門から桜の古木やアジサイの参道を進んで北に曲がり、黒門を過ぎて境内に入ると左に太子堂がある。正面奥には赤門を通って本堂と庫裏が並ぶ。左手奥には正面に万日堂、その左に手前から一切経藏、百体觀世音堂、閻魔堂が北向きに配置されている。全体として伽藍の規模が大きく17~18世紀の貴重な建築物群が残されている。境内には「一石造地蔵菩薩像」(市重文)ほか寛永年間(1624~1644)以降の多くの石仏や石造物が点在している。

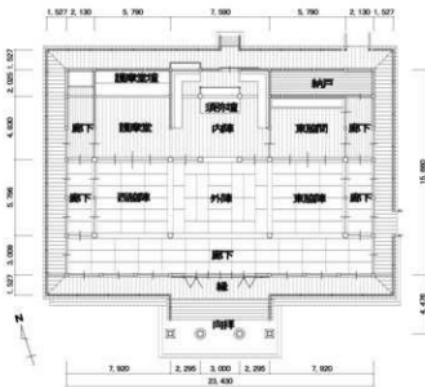


図20-2 平面図(本堂)

由来および沿革

『渋川の文化 真光寺』では平安時代のはじめ慈覚大師によって草創されたと伝えられている。白井長尾氏が白井城主に任せられた際に当寺を祈願所として境内に阿弥陀堂を建立し、応永年間に比叡山の叡海法印が住して開基とされ、当代まで64代の法燈

を保っている。元和4年(1618)には第17世乗存が權僧正に捕せられ、多くの学僧や信徒が集まる僧正寺となり、天台宗開闢5箇寺の1つに数えられている。

本堂(図20-2、表20-2、写20-2~20-7)

寺伝によると、寛政3年(1791)に焼失、直ちに再

表20-2 本堂

建造年代／根据	寛政5年(1793)上棟／桟札	構造・形式	正面23.43m、側面15.60m、入母屋造、平入、向拝3間唐破風屋根、銅板葺(当初茅葺)、六つ間
工 匠	[大工]大棟梁：當國群馬郡金井村故豈後守積保嫡男 岸壹後頭源舜興、小棟梁：同國吾妻郡小泉邑故積保嫡門 白石相模頭藤原舜博、脇棟梁：同國當郡當所門人 岸右近彦四良舜吉、大臣小工：長岡村 岸多七舞喜、番匠：八木原邑 狩野伊平、例席：湯上邑 神保要八、他21名	基 础	[身舎]布石(自然石切石) [向拝]礎石、礎盤
軸 部	[身舎]角柱、丸柱(棕、計12本)、差鶴居 [向拝]角柱2本(棕、几帳面)、丸柱2本(棕、胡麻被狀)、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[身舎外部]正面、側面1間平三斗、他繪様肘木 [身舎内部]内外陣出組 [向拝]角柱部・二重出三斗積上彫形、丸柱部・平三斗
中 備	[身舎外部]なし [身舎内部]内外陣幕股 [向拝]影刻、幕股	軒	[身舎]正面、側面1間ニ軒疊垂木、他一軒疊垂木 [向拝]一軒疊垂木、輪垂木(茨有)
妻 飾	二重虹梁大瓶束・菱形、懸魚(蕉)、兎毛通	柱 間 裝 置	桟唐戸、ガラス格子戸、舞良戸、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、昇高欄、擬宝珠高欄	床	[身舎]壘敷 [内陣]拭板張 [向拝]敷石(四半敷)
天 井	[廊下、両脇陣]竿縁 [内外陣]格天井(外陣鏡付)	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(禅宗様)
塗 装	素木、極彩色(欄間影刻、支輪、内外陣幕股)	飾 金 物 等	藻座、釘隠(饅頭、六葉)
絵 画	[外陣]天井絵(花・龍)、左右襖絵 [内陣]天井絵(花・雲)	材 黄 檻、杉	
彫 刻	[身舎]内陣正面欄間(天女)、支輪(雲・波)、外陣欄間(十六羅漢、菩薩、出家得度)、支輪(雲・波)、脇間(持国天・多聞天、赤龍、菊花童、松・菊・河・雲・松・鶴・波・雲)、廊下(二十四孝:董永・陸續・王裒・楊香・郭巨・ゼン子・孟宗・姜詩・大舜) [向拝]木鼻(獅子・狛)、中備(麒麟・龍・亀)、兎毛通(鳳凰)		



写20-2 本堂正面



写20-3 東南側面



写20-4 外陣正面



写20-5 内陣正面



写20-6 右脇間左襖絵



写20-7 廊下右端欄間影刻

建に取りかかる。真光寺古文書「寺院再建立書扣」に寛政4年(1792)7月より寛政7年(1795)10月迄建立とあり、棟札の寛政5年上棟と合致する。その後、数回の改修を行い、平成28年(2016)に大規模改修を行っている。正面7間、側面6間、正面に3間に向拝唐破風屋根を持つ入母屋造銅板葺であり、妻飾りは二重虹梁大瓶束形付である。本堂外部は貫を見せた漆喰塗で四方縁を廻らし、正面と側面1間の組物が平三斗、二軒疎垂木で、他は絵様肘木、一軒疎垂木とし正面の意匠効果を持たせている。向拝は木鼻、中備、兎毛通に彫刻が施され、向拝中備彫刻裏に「威徳山第六十一世僧正 興賢代 大正十二年十一月 寄附者惣檀下 武昌大里郡住 佐藤正貫刻」とあり、大正12年(1923)の改造である。本堂内部は、彫工不明だが、内下陣欄間、支輪、脇陣、廊下に計26枚の豪華な極彩色の彫刻が嵌込まれている。また、内陣格天井、外陣鏡付格天井に天井絵が描かれ、左右襖の山水画に、墨書「醉墨江永年」とあり、落款により「墨渙」と判り、同寺蔵の市重文「真光寺涅槃図」と同じ絵師である。なお、県重文の「木彫狛犬」が東脇間の地袋ガラス戸内に保管されている。

万日堂 (図20-3、表20-3、写20-8~20-10)

建造年代は、身舎正面麒麟の木鼻の柄に記された墨書きにより寛文11年(1671)である。堂の右手にある石造阿弥陀如来立像の銘文に「萬日堂開基權僧正法印全海 延寶三(1675)乙卯年四月吉祥日」とあり建造年代と同時期である。一日に一万遍の念佛を唱える道場で、阿弥陀堂とも呼ばれている。正面3間、側面4間の三方に切目縁を付けた小堂に位牌堂を増築している。外壁の内法上は貫を通した板壁に胡粉

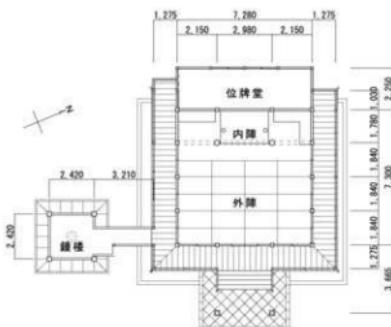


図20-3 平面図(万日堂)

表20-3 万日堂

建造年代／根柢	寛文11年(1671)／墨書き	構造・形式	正面7.28m、側面9.55m、寄棟造、平入、向拝1間、鉄板瓦葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	基礎 基壇 自然石基礎
軸 部	[身舎]丸柱、長押、台輪 [向拝]角柱、水引 虹梁、手挾	組 物	[身舎外部]拳鼻付平三斗 [向拝]拳鼻付連三斗 [身舎内部](内陣)拳鼻付平三斗 (外陣)拳鼻付出組
中 備	[身舎]本幕胶(彫刻) [向拝]板幕胶(彫刻)	軒	二軒疎垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	桟唐戸、格子戸、舞良戸、板壁
締・高欄・船障子	三方切目縁、擬宝珠高欄、登高欄	床	[内陣]拭板張 [外陣]骨敷 [向拝]石敷
天 井	[内陣]竿縁 [外陣]格天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇(和様)、厨子
塗 装	素木、極彩色(木鼻、手挾、彫刻)、朱塗(虹梁、長押、貫、扉)	飾 金 物 等	なし
絵 画	[外陣]天井画(花鳥)	材 質	檜
彫 刻	[身舎外部]軒下隅(龍・鬼)、木鼻(獅子・麒麟) [向拝]木鼻(拳鼻・象鼻)、手挾(花)		



写20-8 万日堂正面



写20-9 万日堂向拝



写20-10 万日堂内部

塗の痕跡が見られる。向拝は片流れで身舎から水平の繫虹梁が掛かり、中央に斗拱を設けて母屋を受けている。身舎の正面虹梁上の大瓶束には獅子、左右に阿吽の麒麟の丸彫極彩色の彫刻があり、花の極彩色丸彫りの手挟も付いている。身舎の隅木部には龍の彫刻、隅木の下では赤・黄・青・緑色の鬼の彫刻（力神）が四方を見張っている。簡素な小堂であるが細部に興味深い工夫を凝らしている。内陣は拭板張、竿縁天井、拳鼻付平三斗、外陣は疊敷、拳鼻付出組、幕股で、内部外陣の格天井には72枚の天井画が描かれている。万日堂から繋がる鐘楼には、万治3年（1660）に再興された県指定重要文化財の「洪鐘」がある。

まんまどう 間魔堂（図20-4、表20-4、写20-11～20-13）

建造年代は、虹梁の唐草や幕股の様子から18世紀前期と推定される。なお、「渋川市の建造物」には、安置されている十王尊像の台座裏の墨書に「元文五庚申（1740）正月十五日安置……佛土 板鼻 田 中兵部 同重次良」とあったと記録が残るが、平成2年の同像修復により現在は確認できない。正面側面共に3間、鉄板瓦棒葺き方形屋根で、外壁は真壁で床から内法までを豊目板張りその上が白漆喰である。軒廻りは正面だけを拳付平三斗と本幕股、他は

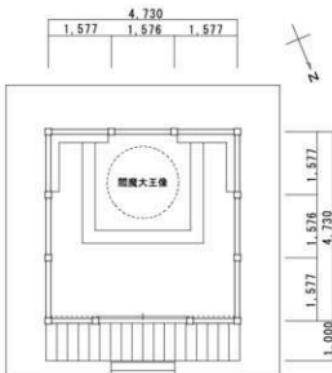


図20-4 平面図(間魔堂)

舟肘木とした簡素な造りである。内部は拭板張、竿縁天井、組物は軒廻りと同じである。二段上がった床の中央に北関東最大級の木彫寄木造の閻魔大王（高さ2.1m）の坐像が北向きに安置され、下段には奪衣婆・司命・司錄の像がある。背面左右の棚には十王尊像が置かれ、他にも小仏像が安置されている。

表20-4 間魔堂

建造年代／根拠	18世紀前期／建築様式	構造・形式	正面4.73m、側面4.73m、方形造、鉄板瓦棒葺（当初草葺）
工 匠	不明	基 础	自然石 独立基礎
軸 部	角柱	組 物	[外部]拳鼻付平三斗、舟肘木 [内部]舟肘木
中 備	[外部]板幕股	軒	二軒半繁重木（地重木は大深重木）
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	格子戸、堅板張（内法下）、白漆喰塗（内法上）
縁・高欄・監障子	一方切目縁	床	拭板張
天 井	竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、朱塗（差鶴居、組物、中備）	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[外部]虹梁（絵様）		



写20-11 間魔堂正面



写20-12 間魔堂軒



写20-13 間魔堂内部

1. 本調査：寺院建築

百体觀世音堂（図20-5、表20-5、写20-14～20-16）

堂宇は、来迎柱左に墨書「奉再建立百觀音堂 明和二乙酉天九月 當山第三十九世權僧正円山周純代」とあり、明和2年(1765)の再建である。北に向いていることから北向百体觀世音と呼ばれ、正面(6.18m)、側面(7.11m)、置屋根形式の土藏造りである。内部は三段に分け、作り付けの須弥壇を設けて西国三十三札所、坂東三十三札所、秩父三十四札所の各寺本尊百体が置かれ、遠隔地にある靈場を一堂に奉安し、巡礼参拝を行う觀音信仰の靈場である。彫刻は、向拝虹梁上と身舎入口欄間、内部來迎柱間に極彩色の彫刻が施されている。來迎柱右に、「奉脩補百体觀音菩薩當山五拾七尊 木範榮純自力之者也 大仏師當國板鼻町 竹林院法橋祐慶房明治廿五壬辰年八月」の墨書がある。国重文の太田市曹源寺栄螺堂（寛政10年(1798)の再建）より早く、百觀音巡礼が当地にも広まっていたことが伺える。また、一切經藏と合わせ土藏造の御堂建築としても貴重である。

一切經藏（図20-6、表20-6、写20-17～20-19）

百体觀世音堂の東に隣接し、天台宗5カ所の學問

表20-5 百体觀世音堂

建造年代／根据	明和2年(1765)／墨書	構造・形式	正面6.18m、側面7.11m、切妻土藏造(置屋根形式)、妻入、向拝1間、鐵板葺(当初板葺)
工 匠	不明	基 础	[身舎]自然石切石 [向拝]礎石、礎盤
軸 部	[身舎]角柱、中段丸柱2本 [向拝]角柱(棕、几帳面)、水引虹梁、海老虹梁、手扶(一对)	組 物	[身舎]來迎柱上平三斗 [向拝]平三斗、拳鼻
中 備	[身舎]なし [向拝]幕殿、彫刻	軒	一軒疊垂木
妻 鈴	なし	柱 間 裝 置	ガラス格子戸、ガラス窓、漆喰壁、板壁
縁・高欄、檻障子	なし	床	拭板張
天 井	井 竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	造付須弥壇
塗 装	素木、極彩色(彫刻)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	櫛、杉
彫 刻	水引虹梁上(迦陵頻伽)、身舎入口欄間(迦陵頻伽)、丸柱間(不明)		



写20-14 觀世音堂正面



写20-15 觀世音堂内部



写20-16 觀世音堂内部丸柱間彫刻

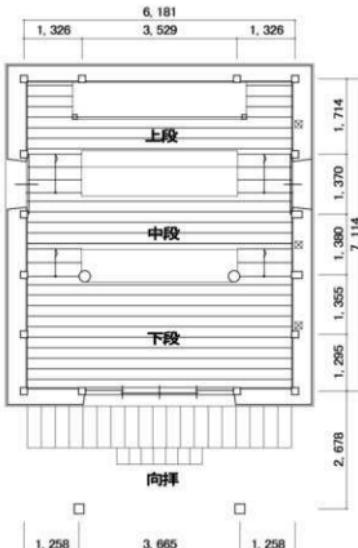


図20-5 平面図(百体觀世音堂)

寺として多くの経典が残されている。正面(4.54m)、側面(4.78m)の置屋根形式の土蔵造。内部は質素な作りであるが、来迎柱周りは朱塗、頭貫上に台輪、組物は平三斗、中備幕股に透かし彫の彫刻が施されている。『渋川市の建造物』には、安置されている傳大土像の体内から発見された覚書に「上野国群馬郡渋川宿威徳山真光寺一切経藏奉安置傳大土普建普成當山廿七世權僧正乘純代新刻彫之千時寶

永六己丑年九月十五日」とあり、宝永6年(1709)には存在し、県内最古の土蔵建築として極めて貴重な遺構であると記されている。本経蔵は虹梁や木鼻の絵様から17世紀中期まで遡ると推定される。

太子堂(図20-7、表20-7、写20-20~20-22)

棟札等は不明であるが、虹梁の唐草や幕股等の様子により建造年代は18世紀後期と推定する。なお、

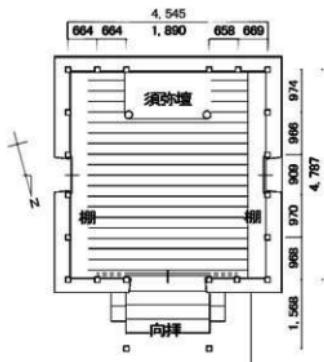


図20-6 平面図(一切経蔵)

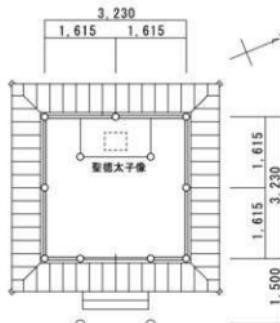


図20-7 平面図(太子堂)

表20-6 一切経蔵

建造年代／根拠	17世紀中期／建築様式	構造・形式	正面4.54m、側面4.78m、切妻土蔵造(置屋根形式)、妻入、向拝1間、鉄板葺(当初板葺)
工 匠	不明	基 磁	[身舎]自然石切石 [向拝]礎石
軸 部	[身舎]角柱、丸柱(来迎柱2本)、頭貫、台輪 [向拝]角柱、水平虹梁	組 物	[身舎]来迎柱上平三斗、縁型(絵様刻線彫) [向拝]なし
中 備	[身舎]来迎柱頭貫上・本幕股 [向拝]なし	軒	一軒疊垂木
要 飾	なし	柱間装置	漆喰戸、ガラス格子戸、ガラス窓、漆喰壁
縁・高欄・脇障子	なし	床	拭板張
天 井	竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	造付須弥壇
塗 装	素木、朱塗(来迎柱、頭貫、幕股、組物)、黒漆(幕股、台輪)、胡粉(幕股)	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	杉
彫 刻	来迎柱頭貫上幕股(菊)		



写20-17 一切経蔵正面



写20-18 一切経蔵来迎柱軸組



写20-19 一切経蔵中備

表20-7 太子堂

建造年代／根拠	18世紀後期／建築様式	構造・形式	正面2間(3.23m)、側面2間(3.23m)、方形造、向拝1間唐破風屋根、銅板一字文字葺(当初草葺)
工 匠	不明	基 础	コンクリート
軸 部	[身舎]丸柱、長押、台輪　[向拝]丸柱(胡麻殻抜)、水引虹梁、海老虹梁	組 物	[向拝]拳鼻付平三斗　[軒廻]拳鼻付平三斗 [来迎柱部]拳鼻付出組
中 備	[身舎]板幕股　[向拝]板幕股　[来迎柱部]板幕股	軒	一軒疊垂木
妻 飾	[向拝]二重虹梁大瓶束	柱 間 裝 置	蔀戸、舞良戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁	床	骨敷
天 井	[内陣]竿縁、板支輪　[外陣]竿縁	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇 和様
塗 装	素木、極彩色(幕股・毛毛通・笈形・支輪) 朱塗(向拝破風・隅木)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 質	不明
彫 刻	[身舎外部]木鼻(獅子)、幕股　[向拝]木鼻(獅子、象)、幕股、笈形、毛毛通　[身舎内部]幕股、板支輪(花・水流)		



写20-20 太子堂正面



写20-21 太子堂向拝



写20-22 太子堂海老虹梁

「上野国寺院明細帳」には「第四十三世亮應寛政九年(1797)建立」と記載されている。正面側面共に2間、四方に切目縁を廻し、銅板一字文字葺きの方形屋根に箱棟を付け、外壁は厚板を柱間に落とし込んでいる。向拝は唐破風屋根で柱は菊花状の胡麻殻抜り、幕股や大瓶束の笈形は大きく極彩色で艶やかである。木鼻は向拝に獅子と象、身舎正面に獅子、背面は拳鼻になっている。須弥壇虹梁上の幕股と彫刻板支輪は極彩色であり、須弥壇の扇子内には聖徳太子像が納められている。小堂であるが様々な手法が施されている。太子堂の前には「壱錢職の聖徳太子塔」(市指定史跡)がある。

まとめ

真光寺は、天台宗関東5箇寺の檀林であり、末寺13ヶ寺と門徒16ヶ寺を持つ。境内は、17世紀中期から18世紀後期建造の堂宇が二つの建築群を成し配置され、閻魔堂、百体觀世音堂、一切經藏は東西を軸

に一直線に並べ、本堂に向北向きの独特な構成になっている。本堂は、古文書・棟札により寛政4年(1792)から寛政7年(1795)の再建は明らかであり、万日堂は墨書により寛文11年(1671)の建造で、当寺院最古の建造物である。百体觀世音堂は墨書より、また、一切經藏と太子堂は建築様式と古文書により建造年代が推定できる。各建物は、軸部や細部意匠に地方寺院の特色を持ち、伽藍規模も大きく、渋川地域における近世寺社建築を理解する上で貴重である。

(難波伸男・林 美幸・宮田賢二)

【参考文献】

- 『群馬県近世寺社建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和53年
- 『郷土渋川第13号』渋川市郷土史研究会 昭和61年
- 『渋川市の建造物』渋川市誌編さん委員会 昭和63年
- 『渋川市の文化 真光寺』真光寺 平成24年
- 『上野国寺院明細帳』群馬県文化事業振興会 平成7年
- 『続ふるさと渋川史帖』大島史郎著 平成31年

24 清泰寺〔せいたいじ〕

表24-1

寺院名	名号山阿弥陀院清泰寺	所在地	渋川市八木原888
宗派	天台宗	所有者・管理者	宗教法人 清泰寺
主本尊	阿弥陀三尊	仏事	節分会(2/3)、施餓鬼会(4/29)
創立・沿革	創立延文5年(1356)、棟札(発見時の上毛新聞と写真ネガで確認)「寺院提供」		
文化財指定	なし		

位置・配置(図24-1、写24-1)

当寺は榛名山東麓 JR 八木原駅近く、滝沢川と牛川にはさまれた平坦地に位置する。近くに古代集落遺跡の有馬遺跡がある。街道から西に入った脇道に接する参道を北に進むと左に八木原目薬師堂、正面に山門を見る。山門をくぐると正面に本堂があり、本堂西に庫裏を配する。本堂右手前には車庫、庫裏手前には蔵、外便所を置き本堂裏には書院を配する。境内は広く手入れの行き届いた庭があり、本堂前の庭には垂れ桜がある。庫裏前には石造物を配す。庫裏北側に新庫裏を配し、庭には古い井戸や柘榴の老木がある。墓地には多くの石仏があり古さを偲ばせる。

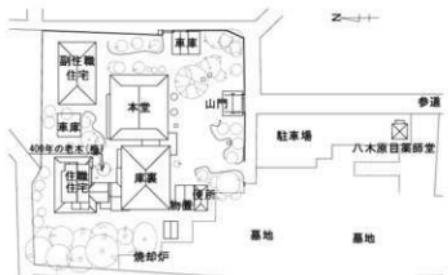


図24-1 配置図



写24-1 境内全景

由来および沿革

当寺は、佐渡奉行街道の八木原宿に設けられた寺院の一つである。寺伝によると創立は延文年間(1356~1361)と伝えられているが詳細は不明である。開基は第1世重順和尚、箕輪城主長野信濃守の嫡流として比叡山で修学後当地に来たとされる。真光寺文書に開山権大僧都大阿闍梨法印重順、享禄2年(1529)が記されている。「寺院本末帳」に真光寺末寺とある。阿弥陀三尊を安置「名号山 阿弥陀院清泰寺」の許を得て、五体安寧・仏法興隆の道場となした。重順和尚は享禄2年(1529)に78歳で没す。境内北側にある八木原村の鎮守諏訪神社の別當であった。明治7年(1874)に八木原尋常小学校として使用された。

本堂(図24-2、表24-2、写24-2~24-7)

元文5年(1740)。平成元年(1989)の屋根改修時見つかった棟札による。明和5年(1768)第14世貫誠代改造、明治41年(1878)・昭和28年(1958)屋根改修のものもあった。正面7間(14.09m)側面6間(11.36m)入母屋造銅板葺、平入、向拝は無く六つ間取型の平面である。外部は絵様肘木、軒は一軒疊垂木、壁は漆喰塗の簡素な造りになっている。内部は来迎柱、内外陣境柱を丸柱とし、来迎柱上に出三斗、台輪、内外陣境柱上を出組とし、側面に実肘木を設けている。内陣外陣との境には虹梁の上に高肉透かし彫りの欄間を嵌め、天井支輪も彫刻の上に極彩色を施している。内外陣共格天井に天井絵(後補)があり、外陣正面に素木の欄間彫刻が嵌め込まれている。須弥壇裏に墨書き明和6年(1769)白露中旬「現住堅者法印貫誠、大工 當村住健田文右衛門・藤原英寧 造之」がある。(天井絵の銘: 昭和戊辰六十三歳初秋収得法眼 晶光 茂香畫 敬)とある。

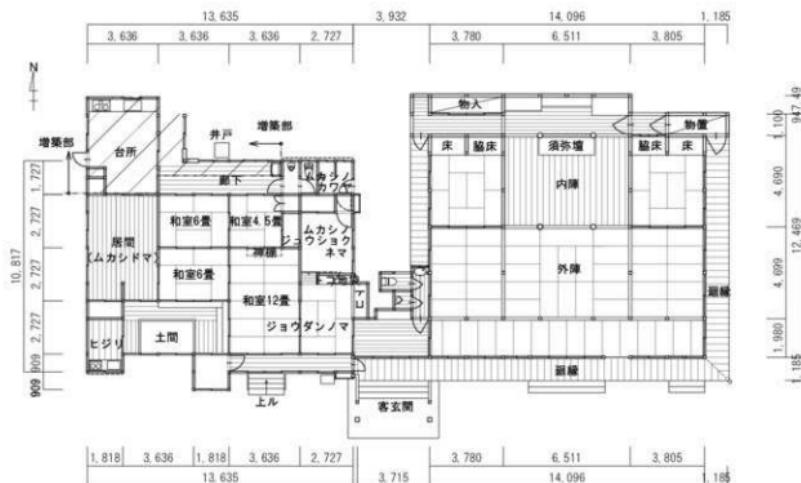


图24-3 平面图(底座)

図24-2 平面図(本堂)

表24-2 本堂

建造年代／根据	元文5年(1740)／棟札	構造・形式	正面14.09m、側面12.47m、入母屋造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	鉄筋コンクリート(後補)
軸 部	角柱・来迎柱・内外陣境柱丸柱(棕)計4本	組 物	[外部]絵様肘木 [外陣]正面出組・側面実肘木 [内陣]来迎柱上出三斗・台輪
中 備	[外部]なし [外陣]幕股	軒	一軒隣垂木
妻 飾	木連格子、懸魚	柱 間 裝 置	アルミ引き違い戸、火頭窓 [壁]漆喰塗
縁・高欄・脇障子	二方切目縁	床	[廊下、外陣、脇陣]畳 [内陣]板張
天 井	[内陣、外陣]格天井	須弥壇・厨子・宮殿	[内陣]須弥壇(禪宗様)
塗 装	[外部]素木、極彩色(内陣正面、外陣中備、支輪)	飾 金 物 等	釘隠
絵 画	[内陣]天井繪(花園)平成元年(1989) [繪師]金井昌光[寺院提供資料]	材 質	檜、杉
彫 刻	外陣正面欄間(中央 龍 素木)		



写24-2 全骨



写24-3 側面



写24-4 向拂



写24-5 外陣



写24-6 内陣正面



写24-7 虹梁

庫裏 (图24-3、表24-3、写24-8～24-10)

建造年、工匠不明。正面(13.63m)、側面(10.81m)、寄棟草葺きの上に鉄板葺。軒はせがい造である。玄関には絵様線彫りの虹梁がある。外壁は真壁造漆喰塗り。梁下には刻線彫りした絵様肘木を備え出隅部に絵様縁型を設けている。古くは玄関から居間にかけて土間であった。土間にはカマドを設え、囲炉裏があった(聞き取り)。玄関天井は板張りである。居室天井は杉板張り竿縁天井、壁は漆喰塗り。間仕切りには板戸が用いられ、花鳥の極彩色の絵が描かれている。作者は不明である。虹梁の唐草、木鼻から19世紀前期と推定する。現在は平成5年(1993)庫裏を増築、平成12年(2000)に書院が本堂裏側に増築されている。

山門 (图24-4、表24-4、写24-11～24-13)

建造年は寛政10年(1798)。平成元年(1989)発見の「奉本師釈迦牟尼如来謹上大荒神多婆天王守護一天表三山繁昌当院門造立」、第18世賢者法印慶順代による。1間1戸平入、棟上門、切妻銅板葺正面(2.74m)、側面(1.58m)本柱を五平とし控え柱は角柱である。銅板葺切妻造。正面に獅子鼻、組物は二手

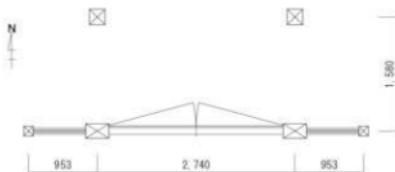


图24-4 平面图(山門)

表24-3 庫裏

建造年代／根拠	19世紀前期／虹梁の唐草絵様、木鼻、1間：6尺	構造・形式	正面9間(13.63m)、側面8間(10.81m)、寄棟造鉄板葺(草葺の上)
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	角柱	組 物	【外部】絵様肘木 【隅部】縁型絵様線彫
中 備	なし	軒	せがい造
妻 飾	なし	柱 間 裝 置	アルミサッシ引き違戸 【壁】漆喰塗
縁・高欄・船頭子	なし	床	土間、疊、板張
天 井	竿縁天井(杉)	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	【内部】板戸に花鳥絵(彩色)	材 質	杉
影 刻	木鼻(渦)		



写24-8 正面



写24-9 木鼻



写24-10 上段の間

表24-4 山門

建造年代／根拠	寛政10年(1798)／棟札(発見時の上毛新聞と木が「寺院提供」)	構 造 ・ 形 式	1間1戸棟門(2.74m)、側面1間(1.58m)、切妻造、平入、銅板葺
工 匠	不明	基 础	礎石
軸 部	角柱	組 物	二手先
中 備	[正面]不明 [側面]幕股	軒	二軒半繁垂木
妻 飾	虹梁大瓶束、笈形、支輪	柱 間 裝 置	板戸
縁・高欄・脇障子	なし	床	砂利敷
天 井	格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木、胡粉(木鼻、支輪、虹梁)	飾 金 物 等	台輪小口
絵 画	天井絵18枚(花絵)	材 質	檜
彫 刻	彫刻版支輪、木鼻、虹梁(絵様)		



写24-11 正面



写24-12 妻虹梁



写24-13 天井絵

先、妻飾は虹梁大瓶束笈形付で妻中備は幕股。全体は素木だが、獅子鼻、幕股、支輪に彩色が施されている。虹梁の唐草模様、木鼻、支輪から棟札通りである。格天井の花絵の天井画は平成元年の改築時に本堂の天井画を転用したものである。

まとめ

当寺は古く佐渡奉行街道の整備と共に設けられたが建造年代の確定がなされていなかった。平成元年(1989)の本堂、山門改修時に見つかった棟札(写真的ネガフィルム)により建造年が明らかになったこ

とにより、本県18世紀の寺院建築を知るうえで大切である。山門の柱に五平の角柱を設けているのは新しい発見である。

(須田睿一)

【参考文献】

- 『渋川市の建造物』渋川市 昭和63年
- 『群馬県近世寺社建築緊急調査報告書』群馬県教育委員会 昭和54年
- 『匠明』鹿島出版 昭和46年
- 『ぐんまのお寺 天台宗II』上毛新聞社 平成12年
- 「上毛新聞記事 平成元年9月7日」「寺院解説文」「寺提供資料」